市制20周年記念

玉名市の文化財

総集編

玉名市教育委員会

玉名市の中心部

序

わがふる里「玉名」は、北に緑濃き山々を仰ぎ、その山あいから大阿蘇に源を発した清流菊池川が市の中央を南に向ってゆうゆうとして肥沃な豊土をつくりながら有明海にそそいでいる。

この沃野に我々の祖先は住居を構え、文化を育み、時の流れと共に歴史を刻んできた。これ等先人の遺跡は市内各所に現存し、今なお厳然として偉容を誇り、我々にその昔を語りかけている。

これ等を通して我々の郷土が縄文時代の古くから「玉杵名」の首邑であり、政治、経済、文化の中心として栄え続けて来たことが明白である。

昭和２９年４月玉名町を中心に１３ケ町村が合併して「玉名市」が誕生、今年で満２０年、所謂「成人の年」を迎え、今又有明広域圏の「中核都市」として益々その発展が期待されていることは誠に感慨深いものがある。

本市は発足以来これ等民族的にも貴重な資料を後世に伝えるべく教育委員会並びに文化財保護委員会の協力を得て、積極的にその保護、保存に万全を期して来たが、今回市政２０周年を記念して、過去４ケ年にわたって刊行してきた「玉名市の文化財」を一巻にまとめ更に充実したものとして発刊することにした。

本資料により郷土の歴史的遺産に対する認識を深めて戴き、貴重な文化財の保護に更に一段の御協力をお願いすると同時に、われわれの先人の遺された文化財を継承しこれを師として新しい「文化の創造」に力強く前進して戴きたいと衷心より念願してやまない。

昭和４９年３月

玉名市長　橋本二郎

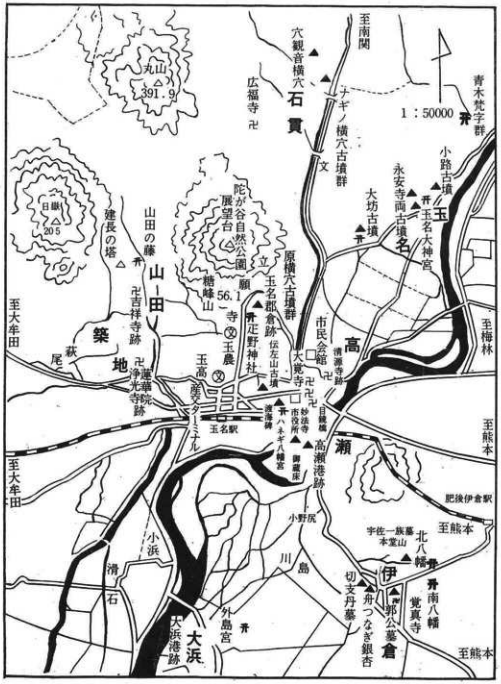
目　　次

伊倉本堂山補陀落山渡海碑…… 43
肥後同田貫とその遺跡…… 44
龍造寺隆信の首塚…… 46
切支丹墓碑…… 47
肥後四位官郭公墓…… 48
川床経塚…… 49
豪潮の宝篋印塔…… 50
春出山伏塚…… 51
高瀬港・御蔵床遺跡…… 52
晒御蔵床・御番所跡…… 54
西南の役跡…… 55
第３章　美術工芸
清源寺釈迦仏・多聞天像…… 57
広福寺聖観音立像…… 58
広福寺本尊釈迦三尊像…… 59
地蔵菩薩半跏像…… 60
弊福寺本尊薬師如来両脇侍日光・月光菩薩立像…… 61
清源寺六観音・釈迦牟尼仏…… 62
誌坂阿弥陀如来鋳立像…… 64
玉依姫女神像…… 65
豪潮筆　座具絵・文珠菩薩画像…… 66
明教寺本堂天井画…… 67
伊倉南八幡宮加藤清正寄進の能女面…… 68
外島宮蔵廻船模型…… 69
外島宮狛犬…… 69
外島宮絵馬　大浜港の図…… 70
伊倉北八幡宮獅鳴香炉…… 71
小代焼…… 72
晒神社の彫刻…… 73
川床神社の彫刻…… 74
刀　九州肥後同田貫上野介…… 76
太刀　八幡宮神剣…… 76
刀　肥後同田貫宗広…… 78
繁根木八幡宮…… 79
高瀬目鏡橋…… 80

目　　次

第４章　古文書（古記録・墨跡）
広福寺文書…… 81
大智とその筆跡…… 82
光徳寺文書…… 83
小森田文書加藤清正下文…… 84
疋野神社…… 85
繁根木八幡宮楼門扁額原書軸…… 87
伊倉八幡大神祠記…… 88
豪潮筆紺紙金泥仏説阿弥陀経…… 89
豪潮筆六曲屏風…… 89
豪潮筆宝篋印陀羅尼写経軸…… 90
平野国臣の槍…… 91
西依成斉の書…… 93
第５章　民俗資料
繁根木八幡宮節頭…… 94
伊倉八幡宮練り嫁（ネロミヤー）…… 95
玉名の若衆神楽…… 96
梅林菅原神社流鏑馬…… 97
萩尾の花棒踊り…… 97
勅使の冠…… 98
提灯かつら…… 99
肥後琵琶師永松大悦…… 100
第６章　天然記念物
船つなぎの銀杏…… 101
山田の藤…… 102
伊倉南八幡宮の大楠…… 103
伊倉南八幡宮のナギ…… 104
菊池川堤防のはぜ並木…… 105
玉名温泉玉栄館の藤…… 106
あとがき…… 107
付　録
玉名市指定重要文化財一覧表
玉名市文化史年表

玉名市文化財所在地略地図



第1章　古墳及び出土品

大坊古墳壁画(玄室厨子奥壁)

大坊古墳
(県指定史跡)

永安寺西古墳の西方約 700m のところにあり、同じ地続きの南斜面に玉名平野に面して築かれている。

装飾のあることで永安寺二古墳とともに早くから学界に知られている。

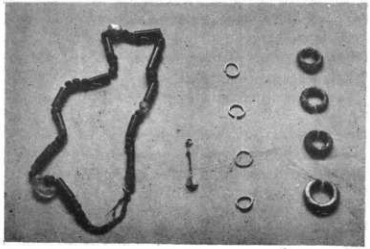
昭和38年5月内部の清掃作業に際して、従来不明であった内部構造や壁画、副葬品等に至るまでその全容が明らかとなった。

横穴式の羨門から、前室、奥室になり、それぞれ装飾のある石扉があり、割石を小口積みにして石室をつくり、全面朱が塗られている。奥壁に接して切石を組んで石厨子を設け内部を三面五段に重ねた朝倉文を赤、青で彩色し、その間に6個の円を配置して美しくかざる。

前室よりは馬具、須恵器類、奥室よりは装身具、武具、工具類など多数の副葬品を出した。

純金製垂飾付耳飾

大坊古墳副葬品の一部装身具(市指定文化財)



大坊古墳出土の碗

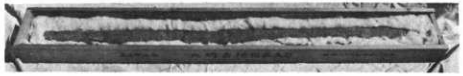
青磁碗

直径6センチ、高さ 0.8 センチの高台をつけ、そのつけ根から外へ急に張りだし、漸次上へ大きく開き 6.5 センチの高さで直径 16.3 センチの大きさの口縁となる。

内がわにだけ簡略された草花のひっかき模様を施こし、内面に鶯色の釉薬をかけ、優雅な青磁独特の味わいを出している。

昭和３８年５月、大坊古墳の内部清掃の実測作業中、玄室内石厨子の左側壁外、石室左側壁との間の、床面上３０センチの土中より発見されたもので、中国宋代のものと考えられ、大坊古墳造営後、ずっと後のころに納入されたもので、同墳最初の開口時期を裏付けるものとされる。青磁は中国が世界に誇り得る名品で、わが国へは奈良時代（約１２００年前）頃から輸入され、貴族や寺院などのあいだに珍重された。

（市教委蔵）



大　刀

鉄　鏃

須恵器

永安寺東古墳
（県指定史跡）

永安寺西古墳の東約３０ｍの地点玉名丘陵の南傾斜面に位置する。

内部は前室と奥室に分かれているが、前室羨門が崩壊している。

下部は巨大な切石を組んで障壁とし、上部に角石を積み上げて天井をつくる。奥壁に接し石厨子を設けて屍床を覆う。

永安寺東古墳外景

前室の三壁面には見事な壁画が描かれている。

東側壁には大小９個の円と、６個づつ横２行の円を、他は上部の積石に舟、三角形などを配して朱で塗り、正面羨門には三角形をたてに向い合わせに並べて赤で塗り、西側壁も同様の構成の壁画になり、一部に馬一匹を配したのが認められる。また奥室厨子の一部に小さな三角を並べた鋸歯文もみえ、古墳の壮大さと、壁画の美しさとがよくマッチして造られている点まことに素晴らしい土木と造形の技術である。

永安寺東古墳壁画（前室東・北面）

永安寺西古墳
（県指定史跡）

永安寺東古墳の西方約30ｍの竹林中にあり、自然の丘陵を利用して石室が造られ、その上を丸型の封土で覆う。

内部は三つの壁面ともに巨大な切石一枚ものを組みその上に方形の石を積み重ね、大石を上から覆うて天井を築き壮大で精巧なものである。壁面の三方に装飾文がある。横に三段に区画し、径24cmの円を５個づつ線刻し、何れも同様の手法をとっている。東壁の一部には２本の鋼鉾らしい施文もある。

永安寺西古墳入口

永安寺西古墳玄室天井部石組

細い刻線は彩色のための輪郭で、朱を塗ってあろうが現在では認められない。

この古墳がいつのころに開口されたか明らかでなく、出土品なども不明である。

横穴単式の装飾古墳であるが、奥壁をそのまま利用して石厨子のそなえがあったことが最近わかった。

装飾文様が、規模の壮大さに比べ極めて簡素であることが特色といえよう。壮大であるがゆえにこんな文様が格好なのかもしれない。

永安寺西古墳壁画（玄室奥壁）

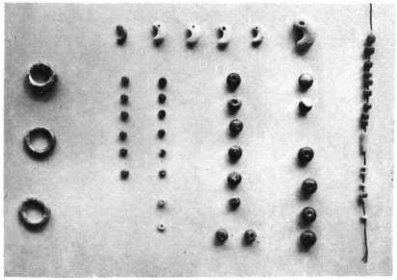
小路古墳全容

小路古墳
（市指定史跡）

玉名平野の北に連なる台地の東南端、玉名大神宮の後方にあたる小路部落の一角にある。もとここからおよそ７０メートルの西山頂にあったものを土木工事にかかるため解体し、昭和44年８月移転復元したものである。

安山岩の板石を小口をそろえて積み上げた玄室と、花崗岩４個を組んで２個ずつ左右に立てこれに安山岩の割石を積み重ねて入口の両側を固めた羨門とからなる横穴単式の構造をもつ、古墳時代後期の古墳で、全長５メートル、最大横幅 2.25 メートル。

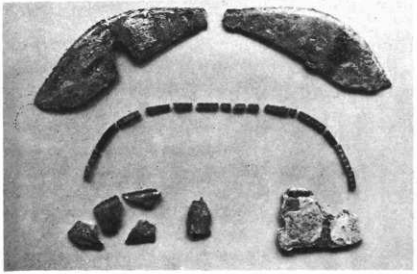
天井部全面及び壁面の上半部が何時の頃からか失われていたが、下半部及び床面全体はよく保存されていた。



全上出土品装身具

玄室床面では、北壁に寄せ、家型系くり抜きの大石棺をおき、その前面両側にＩ基づつ屍床を設け、中間を２列の障石で縦に仕切って羨道としてある。

昭和４１年８月の発掘調査によって全容が明らかにされ、また、多くの副葬品を出した。



小路古墳出土品
（市指定文化財）

出土品は昭和４１年８月に行なった発掘調査の際に発見されたもので、多くは玄室内の北に寄った石棺外周辺に集中していた。これらは装身具、馬具、武具、土器などである。

装身具では翡翠勾玉５個、青玻璃勾玉１個、紺玻璃大玉１４個、白、黄、赤、紺などの色玻璃小玉２９個、管玉１個、金銅環３個が、石棺に寄った右屍床と、羨道奥より、馬具では、鉄地金銅張り鞍飾り金具２個と破片６個及び縁とり金具片多数。鉄地金銅張り雲珠１個、辻金具２個、菱形止金具２個鈴具３個、轡破片１４個、武器では尖根型鉄鏃４本、平根型鉄鏃２本、刀子２本がありこれらは多くは羨道奥付近と左屍床上石棺に近いところより出土した。

土器類では、ほぼ完形の提瓶１個、台付壺の、台の部分２個、口縁の部分１個、杯蓋１個、その他破片１個のほかに内がわに朱を塗った土師杯１個があった。

（市教育委員会蔵）

上　鞍横飾金具

中　馬具（雲珠・辻金具・鈴具・止金具）

下　土器類（須恵・土師）

保田地古墳(第2号墳)石室

保多地古墳（第2号墳）

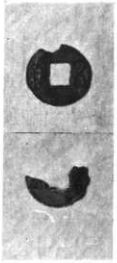
小代山南麓のゆるやかに裾を引いた中に起伏する一小丘陵上の眺望のよい、山田の建長の塔の西北約600メートルのところに位置し、山林開墾中に、古くから知られている保多地須恵窯跡に隣接して発見された四基のうちの一つである。

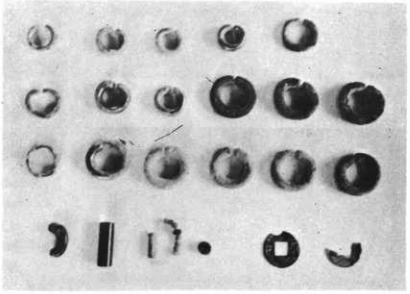
自然の地形を利用し、その頂上に花崗岩の自然石を長四角形に並べて外郭をつくり、全長3.40 メートル、最大幅 1.40 メートル。中ほどに仕切りをとって、前室と奥室との2室に分け、入口を南にとった横穴複式巨石墳である。古い時代に荒らされ、発見当時より西側壁と天井石とが全面取り去られていた。発見後、所有者が一部を復元し、環境を整備して完全に近い保護策がとられている。

床面は全面に石を敷きつめ、奥室にさらに一郭を仕切って奥屍床をつくっているが、副葬品は13個の金鐶と、メノウの勾玉、碧玉の管玉をはじめとして、鉄鏃、鉄斧、轡部品、やりがんな、刀片等の鉄製品多数と、五銖銭2個が主としてこの奥屍床上より発見されている。

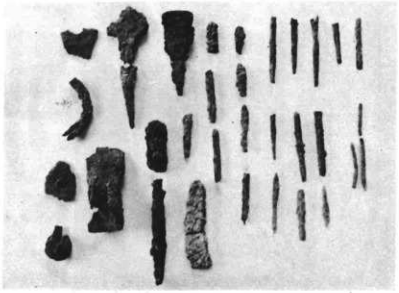
この地域に無限に産出する花崗岩の自然巨石を石材にした巨石墳が、発見後取り除かれて今はない2基と現存する3基を合わせた5基のほか、当市では築地の、西の山古墳以外になく築山地区にのみ分布するもので、それだけに、保多地古墳の存在価値は極めて高い。

保田地古墳全景





上左　須恵器
上右　保田地古墳遠望
　　（○印古墳の位置）
中右　金環・玉・貨銭
中左　貨銭（五銖銭）拡大
下　　鉄器類・鉄鏃・鉄斧
　　・やりがんな・
　　・鉄鋲（くしろ）片
　　・くつわ片
（一括村上一義蔵）



下　繁根木箱式石棺周辺の景観（○印石棺の位置）
中　繁根木箱式石棺
上　繁根木箱式石棺出土方格規矩文鏡

方格規矩文鏡

直径 10.3.5 センチの小さな銅の鏡で、鏡背の図文は、中心に円座紐（そちゅう）をおき、その周りに2重の直線を方格にとりそのあいだに図案化文字8字と、小円座乳8個を交互に並べ、内区の外周の、方格外縁に接してT字型と円座乳とを配列した空間を、短かい円弧を組んでうずめ外がわを少し荒い櫛目文でかこむ。外区は三角縁の内がわに2重の山型連続文と鋸歯文帯をめぐらして飾る。

方格規矩図文では、方格内文字を十二支にし、外周にはTLV字型と、神人、鳥獣の図柄を入れてあるのが多いのに対し、この鏡の場合、8文字とT字型だけで他は省略してある。

小さいためか図文が極めて簡素であることが特徴であろう。肥後でこれとよく似たものに久米若宮古墳の鏡がある。

中国後漢時代に盛行した方格規矩文鏡は早くにわが国へも伝わり、特に北部九州の弥生式後期の墳墓よりよく発見され、また前期古墳から出土した例も多い。繁根木出土の鏡もこのような時代のものと考えられる。大正初年に玉名図書館上り口付近発見の箱式石棺の副葬品である。

（熊本城址顕彰会蔵）

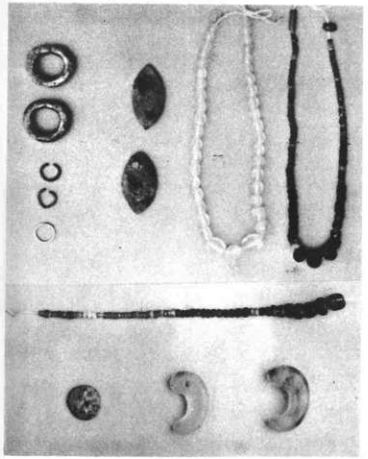
馬出古墳石室

馬出古墳出土品

（市指定文化財）

玉名大神宮境内裏手の高さおよそ30メートルの山頂に円墳馬出古墳があった。採土工事で発見、解体された。羨門を南に向け、うすい割石の小口をそろえ、積み上げて築いた横穴単式石室で、奥壁に接し広い凝灰岩の切石で組み、内外に円文を並べた石厨子が設けてあった。羨門より通路が縦に通り、その左右に一基づつの屍床があった。

副葬品は主として石室内床面上石厨子前の広場に集中し、水晶で造った切子玉、なつめ玉、そろばん玉、勾玉など首飾りの一組と考えられるものと、それらにまじって刀子、刀のつば、尖根式の鉄鏃と、木の葉型装具一組、多数の色ガラス小玉があり、右屍床では金製耳輪、メノウの勾玉と、平根式鉄鏃など、左屍床では銀製耳輪一組、鉄鏃片等がそれぞれ出土し、石厨子の外の、右側壁とのあいだに金銅張り刀の装具片一片と、鉄鏃片数片とそのほかに、あまり例のない馬頭骨が副葬されていた。また、羨門内の左側敷石の上に轡（くつわ）一揃が出土した。この古墳は古墳時代後期のもので、玉名地方に多い円文を主とする装飾古墳の一つに加えられ玉名原始文化の重要な研究資料で出土品は一括して市教委に保存されている。



装身具

水晶製首飾り

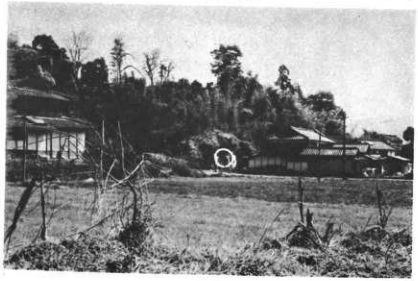
原横穴群全景

原（はる）横穴群

菊池川の支流鍋川中流の西域、富尾部落中に、岩壁をくり抜いて築いた総数百基余りの横穴が四群に分かれて分布し、その一つに原（はる）横穴群がある。

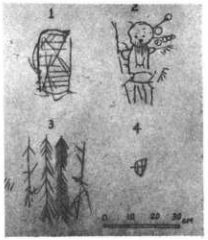
氏神菅原神社台地の南面で、高さ約5メートル、長さ70メートルの岩石の中段と下段に13個の横穴が並んでいる。羨門（入口）の崩壊したものや、大半を失ない奥壁だけが残るもの数基があるほかは、ほとんど原形のまま残っている。多くは2段に切り込んだアーチ型羨門で、内部は中央の通路をはさんで左右と、正面の奥とにそれぞれ一基づつの屍床が刻み出してあり、内壁に装飾文様を施こしたもの2基が含まれている。

原横穴群の地形



そのうちの一つは第3号穴（上写真左端）で、入口前面の左側中段に、弓に矢をつがえた小さな図、内壁奥の左側に頭に二本のかんざしをさし、長いあごひげを垂らし、両手を左右にひろげ、その右手に長柄の鉾を持って立つ人物、奥屍床を被う厨子の前面左側に、何本も横に引いた等間隔の平

第3号穴羨門部



内部図文

行線に交叉する対角線を主調とした櫛の図、右壁の奥に4本の松の小枝をさかさまにして並べたような図文などが線刻されている。とくに第2号図は県内に例のないものとして珍重されている。また、他の一つは第7号穴で、二重アーチ型羨門の外周に円、同心円を赤、黄色などで彩色して連らね、内壁には二角形数個を横に組み、刻み出しの厨子奥壁には同じ大きさの円数個を並べた線刻の図文などが認められ、これらは古墳時代後期に肥後に発達した形式の、豪族一門の共同墳墓である。

第1号図文櫛の図

第3号図文

古城横穴群の中心部　第2群

石貫古城横穴群

蓊池川の支流、錦川の西域で、小代山の東麓にあたる石貫古城部落に、凝灰岩層をくりぬいて築いた総数２５基の横穴群がある。２群に分かれ、その一群は、部落背面の崖の上に７基が並び、他の一群は、北およそ１５０メートルの雑木林中に１８基が東面して並ぶ。

羨門部（入口）の崩壊したもの７基があるほかはほとんど完全に残っている。

外部は、２段、または３段に、角型にきりこんだ飾り壁にし、内部は平床もあるが多くは、羨道（通路）正面奥と、通路をはさんで左右両側壁に接しておのおの一基の屍床が刻み出しになっている。

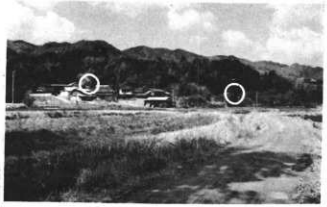
天井は、丸型あり、屋根型あり、天井と壁面との境界に一段を切りこんで区切った、一般的に多く見られる構造で、羨門部に朱色の残るものもある。

古墳時代後期、肥後に集中的に遺存する様式の豪族一門の共同墳墓である。

早くから開口していたらしく、副葬品などは不明である。

古城横穴群　第１群

古城横穴群（左第１群　右第２群）



石貫ナギノ横穴群外景

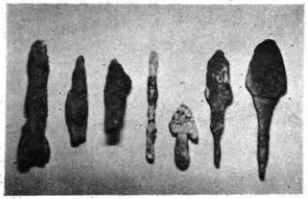
第12号横穴家型厨子刀浮彫

石貫ナギノ横穴群　（国指定史跡）

穴観音横穴につづく丘陵の東面に45基の横穴が幾つかのグループをつくり、約２００ｍに亘って並んでいる。多くはアーチ型。角型の羨門で内部は平床と３個の屍床をそなえたものとに分れ、奥屍床に家型厨子を持つものもある。

第８、９、１９号横穴ではアーチ型羨門の周りに円・同心円・三角形等を赤その他で彩色したのが見られ、第９、１２号横穴のように厨子の内外に刀の浮彫、同心円、鋸歯文、船などの細線文の装飾を施したものもあり、穴観音横穴とともに仏教伝来後の大陸性をもち貴重とされる。

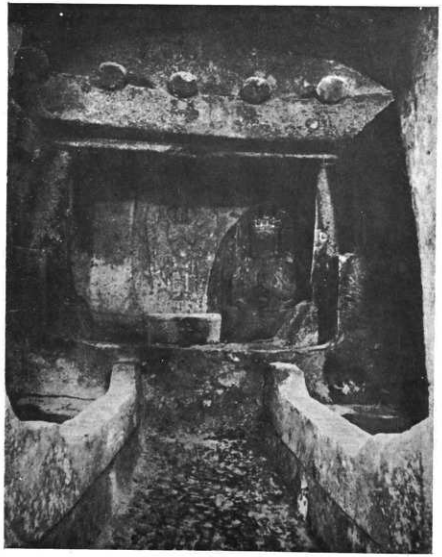
出土品の一部（鉄鉾・鉄鏃）



凝灰岩丘陵の南西中腹に5個の横穴がある。そのうち左右対称に並ぶ3個が優れ、特に中央のものは、アーチ型羨門の縁を赤、白その他で彩色した円、同心円、三角形等で美しく飾り、また中央と左羨門の間の外壁には靭をかたどる大きな刻みもみられ、これらの横穴はこの地方を治めた豪族の墳墓で、仏教伝来後の7世紀前半頃に築造されたものであると思われる。

穴観音横穴外景

石貫穴観音横穴（国指定史跡）



中央横穴内部

いずれもアーチ型羨門を入ると、縦に通る細長い羨道を中央にして正面に、厨子を設けた一基と、船べりを象どる屍床が両側に1基づつ刻み出され、中央の横穴では、それぞれ屍床の上部に屋蓋の軒先をつくりつけ、奥屍床は軒先に5個の軒丸瓦を模した突起をつけて大陸輸入の木造本瓦ぶき建築の構造をつくり出している。

奥壁中央には千手観音の立像を浮き彫り、またかたわらに同形の丸彫り座像が安置されている。

この横穴群は内外の構造や様式からみてまことに荘麗を極め、本邦横穴式古墳のなかで最も優れ、学術的にも貴重とされるものである。

第2章　史　　跡

浄光寺蓮華院跡出土青銅仏頭

浄光寺蓮華院跡出土鎮壇具・瓦（市指定文化財）

浄光寺 蓮華院跡

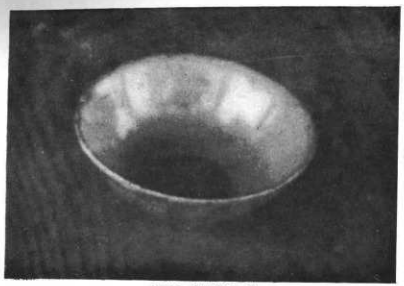
平安時代後期頃、小松内府平重盛が当国を知行してこの地に浄光・妙性の２箇寺と大五輪塔２基を建立して父母滅罪のあとを弔らい、衆僧を集めて常行念仏三昧の道場としたといわれ、以来天正年間に至るまでおよそ５００年のあいだ８町８段の境内に七堂伽藍の規模を誇って栄えたが、天正戦乱の兵火にあい堂宇残らず焼失し、寺院も廃絶したと伝えられる。

昭和４年、この寺跡は蓮華院誕生寺として再興された。敷地開墾に際し、本堂跡と見らるる地下より仏像、香炉、燭台等の荘厳具が、また昭和３８年１２月、現本堂基壇の造成工事中に仏頭、勾玉等がそれぞれ発見された。いづれも出土地点が同じで、旧本堂建築の折に埋納された鎮壇具である。

郭公墓出土青磁碗

（市指定文化財）

覚真寺蔵



青磁碗（内部を示す）

径5、5センチ、高さ6、7センチの丸い高台をつけ、上へ漸次広がり6、7センチの高さで径15、8センチの口縁となる。外がわに上に開く17葉の蓮弁を薄内彫りにめぐらして変化をつけ、全面鶯色の釉薬をかけて優美な青磁独特の味わいをだしている。

青磁は中国が世界に誇る名品で奈良時代頃から我が国に輸入され、貴重なものとされた。

この品は明人郭公が、かっては明朝に仕え後、日中貿易のため伊倉に来て客死する以前に彼地より持ってきたものを死にのぞみその子珍栄が副葬品として墳墓内に納めたものと思われる。

郭公墓出土　青磁碗

六段製鉄跡

三ツ川西原六段の春日光園内にあり、昭和37年8月発掘調査の結果、鎌倉時代（約700年前）頃に砂鉄を焼いて鉄をつくった跡であることが判明した。

山の谷合いの、ゆるやかな斜面の低い崖と、水の流れるところに築かれている。窯は約30度の傾斜面を、長さ140センチ、中心の横幅55センチの大きさの楕円形に、65センチの深さに掘り下げて、内壁全面を、粘土の中に藁屑などを混入して練り合わせた塑土で塗りかため、楕円形の先の最も高くなる部分を底から上端へ75センチにとって煙筒をつくり、最も低くなる手前のほうに炊き口を設けたものであるが、この部分は壊れていて形状も不明である。市内にあるものの中で最もよくのこっているものである。

下　六段製鉄跡遠望（○印窯跡）

中　フイゴの口（市教委蔵）

上　六段製鉄跡出土鉄さいと六段製鉄跡

立願寺廃寺跡出土瓦拓本

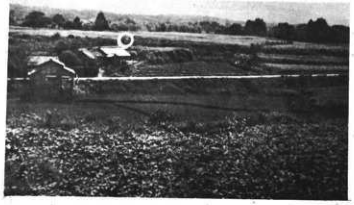
立願寺廃寺跡

奈良時代から平安時代にかけて、玉名地方政治文化の中心が立願寺にあったことは、当時の遺跡や遺物によって証明されるであろう。その一つに郡司の氏神疋野神社の神宮寺、郡司の氏寺立願寺がある。温泉街の北西、上立願寺部落の東隣りに突出する高燥台地に今尚布目瓦の片々が散見されるところ、ここが立願寺跡である。昭和２９年８月発掘調査の結果と、それ以前の発見遺物などから考えると、向って金堂を左に、塔（五重又は三重）を右に配し、その中間の奥に講堂をおく法起寺式と呼ばれる伽藍配置の遺構であることが明らかにされた。出土の瓦は、白鳳期から平安期にかけての単蓮弁複蓮弁唐草文や鋸歯文帯の軒丸瓦や各様の忍冬唐草や四重弧文の軒平瓦など大和法隆寺と共通性の強いものが多く、また軒先四隅を飾る鬼面瓦は他に例を見ぬここだけの珍らしいものがあり、豪快で重量感に富む太宰府発見のものとよく似た鬼瓦も含まれ、これらの資料から見ても、立願寺が地方稀に見る中央系豪壮建築の大寺院であったことが十分理解できるであろう。

仝上　複蓮弁軒丸瓦

玉名郡倉より望む
立願寺廃寺跡（○印一帯）

玉名郡倉跡礎石列



玉名郡倉跡全景（○印礎石の位置）

玉名郡倉跡　（市指定史跡）

立願寺疋野神社の裏手に、面積およそ方２００メートルの平坦台地が開けている。ここが長者屋敷の伝説で知られる玉名郡倉跡である。以前は台地中央に幾つもの大石が並んでいた。その後多くは取り除かれたが、北部の一郭にその一部の７個が残っている。最大は直径１、２０メートル、最少は径９０センチ、上面の平らな自然石で、南北に４個東西に３個等間隔に直角に並ぶ。付近には焼米の散乱も見られる。律令体制下、庶民の国家に納める租税の稲束、その他の産物を収納する倉庫がここに建ち並んでいたという史実をそのまま伝えるものである。

小代山(頂上)正法寺跡

小代山上観音堂観音三尊石仏

小代山筒が嶽正法寺跡

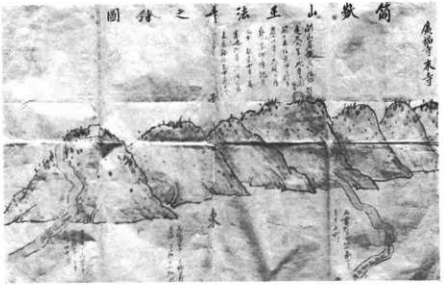
郷土玉名のシンボルとして親しみ深い標高501メートルの小代山頂上に古い寺院の廃跡がある。これが筒が嶽山正法寺の跡で、建暦二年(1212)山城国（京都）泉涌寺俊芿律師の開いた寺である。俊芿は、肥後が生んだ鎌倉時代の日本名僧伝中に名を列ねるほどの人で、仁安元年（１１６６）飽田郡に生まれた。

幼少の頃より頭脳人にすぐれ、世人を驚ろかせた逸話も多い。１０才のとき飯田山の真俊につき顕密二教を学び、１８才にして落髪し、翌年大宰府観世音寺戒壇院において受戒、中国とのあいだを往来し、諸名宿に修業研鑽を積み、のち、肥後に帰って、建久６年（１１９５）、小代山筒が嶽に一つの伽藍を建立し正法寺と号した。宋にあること１３年、その間に、台密禅律の四教を修め、ここで新帰朝の鋭気をもって仏学のかたわら、朱子学を講じた。当時高瀬津を往来する学僧の、律師の高徳を慕って上山するものが常時日に百余人にも及んだという。

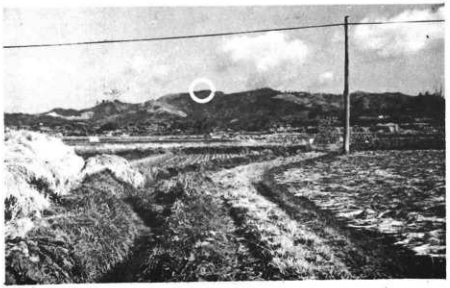
また正法寺を以てわが国儒学の発祥の地とされている。

俊芿は６年にして同寺を二世覚俊にゆずり、京都に移って泉涌寺を中興した。

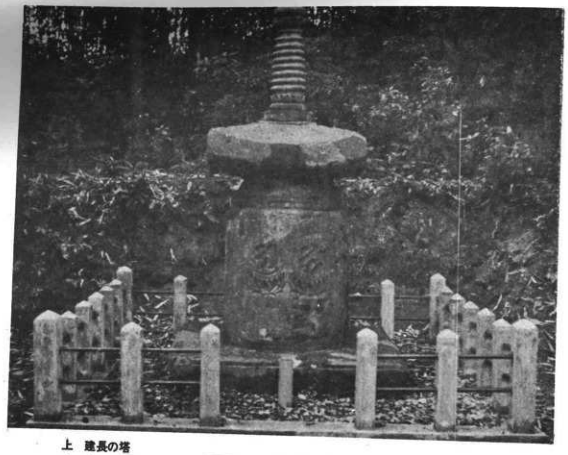
正法寺は、高瀬宝成就寺とともに北条氏調伏の祈願を行ったため、幕府の怒りにふれるところとなり、圧迫を被むり、後年ついに衰ろえ、小代山北麓の上田原村に小堂を構えてここに遷ったが、享保・元禄の頃に衰退し寺宝、寺記等は石貫広福寺に保管され、今に残る山上観音堂も同寺の支配に移された。



本尊観世音三尊石仏や付近に散在する礎石、五輪塔片などは正法寺の遺物で、小代山の史実を今に伝える資料である。



下　小代山南面全景（○印正法寺跡）
中　正法寺跡に残る礎石の一部
上　筒が嶽山正法寺之絵図（広福寺蔵）



上　建長の塔
中　全上銘拓本
下　瀬高台地全景
　　○印　塔の位置

建長の塔

（市指定文化財）

藤で知られる山田日吉神社の西の谷を距てた見晴らしのよい瀬高台地のこんもり茂った森の中に、凝灰岩で造られた釣鐘型の塔婆一基がまつられている。

主体塔身の高さ９７センチ直径７３センチという他に類を知らぬ巨大さを誇っている。俗に「虎御前の塔」といわれる。

建長２（１２５０）年、藤原太子供養のために建てられたもので、この地域に栄えた鎌倉期の文化史を研究する上でも重要なものである。

大梵字・剣不動・阿弥陀三尊

青木磨崖梵字群

（市指定文化財）

青木熊野神社境内にあり、高さ約10m、全長60mの凝灰岩壁の南半分25mの範囲に亘る中腹に、長さ1.90m、巾1.40mの不動尊をあらわす「カン」、弥陀三尊をあらわす「キリク・サ・サク」をはじめとする各種仏、菩薩の梵字が陰刻され、その規模がすこぶる壮大である。後世岩壁の一部を失ない、落下した石塊の中にも梵字断片が認められるが、これらをふくめ総数20字を超えたものと見られる。唐僧善無畏三蔵法師の作と伝えられるが定かでない。不動尊は悪病、火災除けに霊験ありとして信仰され、毎年5月28日不動まつりがある。

梵字のある岩壁

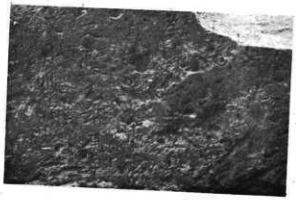
熊野神社とその神域

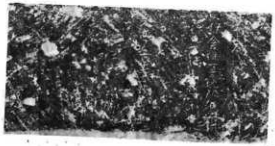
大宮司宇佐一族の墓（市指定文化財）

伊倉八幡宮社僧本堂山報恩寺跡の一郭に、長さ6メートル、高さ1メートルの基壇上に整然と並ぶ7基の凝灰岩の苔むす五輪宝塔群がある。これが大宮司宇佐一族の墳墓で、現存する塔婆の上部はいくつか失なわれているが、方形地輪がよく保存されていて、それぞれの刻銘によってその由縁を十分に知ることができる。

伊倉が康和5（1103）年頃より宇佐大宮司の直轄神領地として代々伝領され、また肥後北部の要衝地として宇佐家が最も意を用いたところであり、鎌倉期の伊倉を知る上で貴重な資料となる。

上　宇佐一族の墳墓全景
中　宇佐公満墓地輪銘
下左　宇佐大宮司公長塔地輪銘
下右　地頭沙弥行意塔地輪銘拓本





蓮華院誕生寺境内　大五輪塔

浄光寺蓮華院跡大五輪塔

築地蓮華院誕生寺境内竹林中に、小さな五輪塔の解体部分の散乱するなかで、ひときわ目につくのがこの大五輪塔である。蓮華院誕生寺は、鎌倉時代創建という高原山浄光寺の廃跡に、昭和4年に再興された寺院である。東塔は総高 2、63 メートル、西塔は 2、65 メートル。ずんぐりとして、均斉のよくとれた鎌倉時代創始期の形式をそのまま伝えた五輪塔の典型というべく、堂々とした巨体を見せている。

創建について肥後国誌は、平安時代の終り頃小松内府平清盛は当国を知行のときこの地に浄光、妙性（尼寺）の二寺と大五輪塔二基を建立して父母滅罪のあとを弔らい、衆僧を集めて常行念仏の道場としたとしている中の大五輪塔はこの塔のことで、また現寺説では西暦1150年頃皇円上人（法然の師）が先祖藤原道兼卿の菩提を弔らうため建立したとし、土地の人は関白塔といっているが、どれをとってよいのか、今に至るまで確かなことは分っていない。旧寺院が天正の兵火で焼失したが、この塔だけはそのまま残っている。

大五輪塔とその周辺

宝成就寺跡古塔碑群（市指定文化財）

不二山平等王院宝成就寺

真言宗城州嵯峨大覚寺として高瀬談議所町にあったが、明治初期に廃寺となって今はなく、その跡には家々が立ち並び、往時の状態を知ることも難かしい。境内の一隅に石仏４体、古塔碑三十数基其の他が現存する。

延喜４年（９０４）山城国醍醐寺聖宝僧正開基、九州真言の根元としたと伝えられる。鎌倉時代初めごろまで大いに栄え「西の高野」と称されるまでになったが、後鳥羽上皇の尊信が厚く、金字額など賜わり、北条氏滅亡の祈願をしたため幕府の嫌忌するところとなり衰運に向いその後火災にあって古記、什器類の多くを失ない以前の由来はまったく不明となってしまった。

観応２年（１３５１）快承和上これを中興したが永正元年(1504)再び炎上のあと、大永元年快空の再建により、以来繁栄を取りもどし、高瀬五山の一つとして宗教、文化開発上重要な地位にあり、役割を果してきたが、たまたま勃発した西南の役の戦火のため堂宇は残らず焼失して、ついに廃寺となった。

観応塔水輪銘

観応２年の石塔

山田白山比（ひめ）売神十二坊

長い花穂の藤で知られる山田日吉神社と、その相殿の白山比売神及び山田山吉祥寺を中心に鎌倉時代（約７３０年前）より修験場の道場として栄えたところ。とくに相殿の白山比売神は境内に十二坊をおいてそれを支配し、部落を指導するまでにのし上っていった。

修験道は、日本民族固有の山岳信仰に仏教が結びついて成立した修業実践を主とする宗教で、修行者を修験者、または山伏といっている。最初大和の大峯山を中心に発達したが後には地方的な道場もできて全国的

十二坊中覚満坊主尊（田代孝生管理）

覚満坊念持仏珠菩薩（田代孝生蔵）

に拡まった。

近世になって修験者の中には村里に定着し、村人の信仰にこたえ加持祈祷や呪術を行なって畏敬され、しばしば村落生活の指導者ともなって明治５年11月太政官布達で、廃止されるまで子孫にうけつがれ、地方文化の向上に寄与するところも多かった。山田白山比売神十二坊はその最も著じるしいものである。

部落に配置された十二の坊は室町時代の中ごろ（約４６０年前）には完成したと見られ、祭時其の他万般に亘って取り決め、これを記録し、各坊輪番で毎年古記録に基づいて１１月２９日に祭礼を行ない、また各坊にはそれぞれ凝灰岩で造った笠塔婆、五輪塔、宝塔や、花崗岩、安山岩の自然石を守護尊としてまつり、天文２年（１５３３）以来の古記録帖５冊と別冊新記録帖とともに子孫に伝え現在に及んでいる。

修験場を中心にし発展した古式整然とした部落の構成と、地方修験道の民間信仰研究上特に注目される。

下右　徳蔵坊主尊（藤本義文管理）
下左　演奏坊主尊（寺本雅次管理）
中　円蔵坊主尊（山村直光管理）
上　法泉坊主尊（金田　稔管理）

聖信坊落空上人の墓

北石貫大平寺部落はずれの眺望の地に、凝灰岩で造った方形の台石の上に、上端の尖った高さ９５センチの長三角形自然石の碑が西に面して立ち、正面に「聖信坊落空上人之墓」右側面に「建長五年三月廿四日」と陰刻の銘がある。狭い境内であるが、つつじなどの植え込みで美しく整備され、常時香華が絶えない。

落空上人は鎌倉時代（１２００頃）親鸞上人同門の高僧で若くして才能を発揮し、その高徳は無着菩薩の権化と称されるほどであった。晩年、師法然のため故あって筑紫へ流罪の身となり、この地に身を寄せ死んだので大平寺近くに埋葬したという。

左上　墓碑右側面刻銘
左中　墓碑全面全容
左下　墓碑周辺の景観（○印墓碑位置）
右　　仝上前面の刻銘

補陀落渡海碑下半部刻文

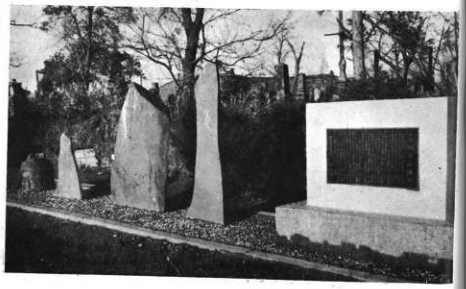
補陀落渡海碑拓影

補陀落渡海碑　（市指定文化財）

高瀬繁根木八幡宮裏の稲荷堂前にある。高さ１、３５ｍの薙刀型安山岩の自然が用いられ、西向きになる表面の上端に日、月をおき、中央に阿弥陀、観音、勢至の仏像三体の線刻と「永禄十一戊辰十一月二十八日、武州住秀誉上人作、善心大徳、下野国弘円上人、同船駿河道円行人、小旦那計家深兵衛、施主西光坊、大小旦那、現世安穏後世前処」と刻文がある。

海上にある観世音の浄土とする補陀落（ふだらく）世界へ船出するにあたり、永禄11年（1568）11月28日に、弘円上人を先達とし、駿河住善心、遠江道円両行人が観音信仰のため肥後国高瀬に下り、船出に際し大願成就を祈り、各地大小旦那の喜捨を得て秀誉上人、善心大徳等が立てたもので、補陀落渡海に関する資料として伊倉本堂山の碑とともに貴重とするものである。

整備された渡海碑とその一群



伊倉本堂山補陀落山渡海碑

全上　碑銘拓本

伊倉本堂山補陀落山渡海碑

伊倉は、西方海上に浮ぶ雲仙の山越しに、さらには観音浄土舟山列島”補陀落山”を想いえがくにはまことにふさわしいところであった。かって、人々は妖しくも美しいその幻想の世界を狂気のように願い求めた。

落日の海上に一葉の舟を浮べ、この世を無常と観じ、来世の観音浄土を喜々恍惚として舟もろともに捨身往生を遂げる人たちがあった。これが補陀落渡海なのである。

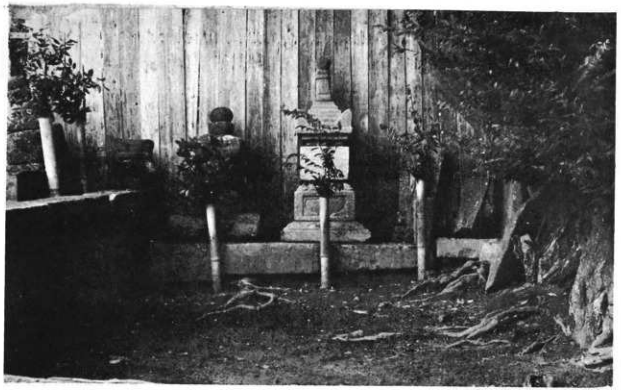
天正４年（１５７６）下野国（群馬県）の夢賢という僧がはるばるとこの地に来て、観音浄土を求めて入水往生を遂げたおりのものである。

碑は自然石の安山岩で三角形を帯び、その高さ１、３５メートル、最大幅９０センチ、梵字阿弥陀三尊の下の左に「千時天正四年八月彼岸日」、右にはこの碑の施主を明らかにする「本願尾州之住月照上人」の文字が刻まれている。

この碑は高瀬繁根木の渡海碑とともに、日本文化史上まことに貴重な資料となるものである。

本堂山遠望（○印渡海碑の位置）

本堂山板碑群（○印渡海碑）



龍造寺隆信首塚

龍造寺隆信首塚

市内高瀬新町願行寺本堂裏にある。天正１２年（１５８４）３月２４日、龍造寺隆信が数万の大軍を率いて島原に押し寄せた。有馬の原城主はその時１５才。西有家の須川海岸に上陸した薩摩の応援軍と合せた八千の兵をもって森岳(現在島原城)に本陣を構え、沖田が原（現島原鉄道三会駅付近）で決戦をした。終日決戦の果てに龍造寺軍の戦運つき、力及ばずと知った隆信は床凡に腰かけ、泰然自若として動かなかった。それと知った薩摩軍の武将川上左京亮は隆信の面前に進み出て一礼の後、後へまわって首を払った。こうして、猛将龍造寺隆信は５６才を一期として沖田畷の花と散った。隆信の首級は柳川城にあった鍋島加賀守直茂のもとへ送られたが、直茂は、とむらい合戦もせずして受取ることは先主に対し道儀にそむくとしてこれを辞退した。そこで薩摩軍は本陣八代へ持ち帰る途中玉名郡高瀬川（現玉名市）にさしかかるとにわかに首級が重くなり、盤石の如くにして川を越すことができず奇異に恐れ、首級を高瀬願行寺主四阿弥仏という時宗の僧に任ね、葬送の儀を執行し、境内に埋葬した。

現在の願行寺山門及び本堂

胴体は、佐賀の大圭和尚が引きとり、北高来湯江和銅寺で火葬後佐賀龍泰寺に葬ったが明治四年三百年忌に当り、首級とあわせ、その菩提寺佐賀高伝寺に改葬した。願行寺に首塚の跡が大切に残されている。法雲院殿泰巌宗龍大居士はその法号である。

左　佐賀高伝寺龍造寺隆信夫妻の墓

右　仝上隆信の墓

切支丹墓碑

（市指定文化財）

伊倉唐人町の墓地にあり、地に伏せられ、長さ57cm、底巾35.5cmの大きな蒲鉾型をした異国的な珍らしい墓碑で、前面の凸出した縁どりの中央に花十字の十字架が刻まれている。

伊倉町に西洋文化と共に切支丹が栄え多数の信者を出した。この墓碑はこの地で布教につとめたパテレンの墓である。

伊倉切支丹墓碑

四位官郭公墓全景

郭公墓銘

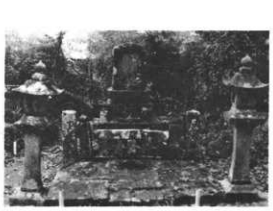
肥後四位官郭公墓　（市指定文化財）

伊倉鍛冶屋町にあり、「しいかんさんの墓」と呼び畏敬されている。広い境内の中心部の礎石上に飾り雲脚のついた長方形の石を据え、パック中央に雲脚のある銘板石を立て、飾り縁でとりまく中央に「皇明、考浜沂郭公墓、元和己年仲秋吉旦、海澄県三都男国珍栄立」と記してある。

郭公は明朝に任え四位官を授かり、東洋貿易に乗り出し豪商としての名も大きかった。天正前後ごろ伊倉に来てその事業に活躍したが、不幸にして客死したため、子珍栄が元和５年（１６１９）この地に墳墓を営んでその霊を弔ったものである。墓標は中国様式の、本邦にまったく例をみない珍らしい形式になっている。

川床経塚全景

経塚彼岸まいり



朽木三郎入道の墓

川床経塚

玉名市より南関町へ通ずる川床の街道端に直径８メートル、高さ１、７０メートルほどの丸塚を形づくり、幹廻りが４メートルもある珍種こがの木や、むく、たぶなどの巨木の根がからみ合って塚の上を一面に被おい、かたわらに正徳元年（１７１１）８月１８日に河床村庄屋十右衛門が寄進した地蔵菩薩の苔むす石祠があって、ひとしお、深い霊域をつくっている。塚上に領主朽木三郎入道建立の石碑２基がある。一つは貞享５年（１６８８）５月２日に建てた大乗妙典の一石一字碑で、街道往来の人毎、小石１個づつの寄進を請いみずからその石に大乗妙典の一字づつを書写して塚の地下に埋納した碑で、他の一つは享保９年（１７２４）１０月に建てた南無阿弥陀仏の名号一億二千百六十万遍一日六万遍奉唱供養の碑で、いずれもこの経塚発祥の由縁を示すものである。

俵藤太秀郷の後裔とする薄葉氏が鎌倉時代に玉名郡に下向、代々坂上、坂下１７０町を領した。約２９０年前の延宝年間丹波国より下った朽木三郎はその配下にあり、石尾、福山、川床を治めたが後、福山に隠棲し、仏門に入って余生を送ったという。

福山の眺望地に墓があるが、墓標に「雲老院殿道幽松間居士」と記してある。

豪潮建立　宝篋印塔

豪潮律師

寛延２年（1749）６月、肥後国玉名郡山下村（現信明町）安養寺塔頭専光寺二男として生れた。宝暦５年(1756)７才にして高瀬繁根木八幡宮神宮寺寿福寺に入り、寺主豪旭により剃度し、名を快潮と改めた。以来師によく仕え経を授かるとき口に応じ暗誦して天分を発揮、師の訓訳を煩わさず広く内外の経典に通暁したと伝えられる。

明和元年（1764）16才にして叡山に入り実栄竜山、豪超大僧正の会下に修学得度して諸種の位階、恩恵に浴し名を豪潮と改めた。

明和２年(1782)、繁根木山寿福寺主豪旭の急病死に会い、叡山より大帰し先師豪旭のあとを受け寿福寺の法燈を継いだ。時に34才。

天保６年（1836）尾張国西杉村に生涯を終え、時雨庵に葬られた。

豪潮の宝篋印塔　（市指定文化財）

インド阿育（アジョカ）王、中国弘徳（こうしゅく）王の故事を追い、豪潮は八万四千宝篋印塔建立を発心し、各地の仏跡を巡歴しこの一大誓願を遂行していった。

市内に石造になる宝篋印塔の現存する三つの一つがこの写真で、高さ4.27mあり、最も優れ原型のままに現存している。文化５年（1808）豪潮60才の折の建立である。

㊀上　南・西面塔銘

㊀上　東面塔銘

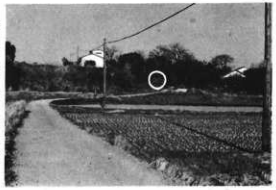
墓碑右側面

山伏塚墓碑

春出山伏塚

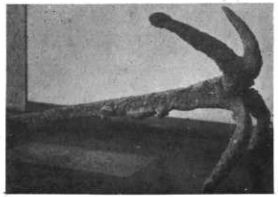
玉名市より福岡県へ通ずる旧街道が春出の凹道を過ぎるころ長い下り坂となる。この坂を「ふるせんぼうの坂」といい、また「やんぼし坂」ともいう。坂の中ほどの北側になる高い崖の中段に古びた小さな石碑が一つあり、「ふるせんぼうの墓」と呼ばれているが、今は枯枝や、雑草の中に放置され、かえりみる人もない。碑は砂岩で造られ、高さ５１、５センチ、幅２３、５センチ、厚さ１３センチの小さいもので、上部を横にまるくした長方形の塔身だけの簡素なものである。右側面に「福宗善八」とあるが、善八はふるせん坊の俗名であろう。山法師が生きながらこの地に埋められていると言い伝えられる。

墓碑銘拓本



山法師塚（○印春の凹道）

上　高瀬港跡全景
左中上　第１波頭跡
左中下　第２波頭跡
左下　仝上付近川床発見の錨
（市指定文化財）
下右　第２波頭付設の俵転場跡



上　御米山床石垣の一部
中　仝上石垣銘拓本
下　高瀬御蔵礎石列

高瀬港・御蔵床遺跡

旧高瀬港は、菊池川河口に臨み、有明海唯一の良港として古くから唐船が出入した。また留学、修行僧や日中貿易、軍船の出帆などに利用されて、江戸時代以前まで大いに栄えた港であった。天正16（1588）年加藤清正の肥後入国後、菊池川堰替工事のあと港を改修、米倉を設置し、城北経済の中心地として産米の集積、輸送に利用され、高瀬はこの港の活動を基盤とし近世的都市へと急速的に一大転換を見せた。加藤氏のこの事業はそのまま細川氏に受け継がれ、船着場、御蔵の設備をさらに拡充し産米は御用船でこの港より大坂蔵屋敷へ輸送し、現金に替え藩財源とした。こうして港、御蔵経営事業は永く継続されたが、たまたま明治１０年西南の役が勃発し、不幸にして御蔵、蔵米ともに戦火にあい壊滅し、港もこれとともにおとろえた。菊池川西畔の永徳寺に残る船着場、俵転場、御米山床、御蔵床の礎石列等はその事績を今に伝える貴重な遺跡である。

晒御蔵跡・御番所跡

晒は肥後北辺の、菊池川河口に臨み最も重要なところとされ、加藤清正は米蔵を設置し、港を整備して、城北産米の集積と移出に力を注いだ。細川氏時代になって、さらにその事業の拡充をはかり、三棟の米倉を保有し、俵転がしといわれる船場への広い石敷道を工夫し対岸に防砂堤を築くなど各種の施設が完備した。

旧坂下郷八箇村の産米がここに集められ、五百石積みの帆前船でこの港から三角を経て大坂へ送られた。

この事業は明治10年以後廃止されたが、一部は大正時代まで存続した。

晒はまた海上の要地でもあったため、港とお蔵にあわせ、上下二つの番所が設置され、常時水上の警備に当った。

切支丹禁制後はとくに厳しくし、島原、天草方面より侵入する恐れのある切支丹の監視に力を注いだ。この番所もお蔵と同時に廃止されたが今番所跡付近に残る瓦ぶきの家は細川氏の家臣上番役人野村氏代々の宅跡で、九蹴紋を浮きぼる軒丸瓦が散見される。

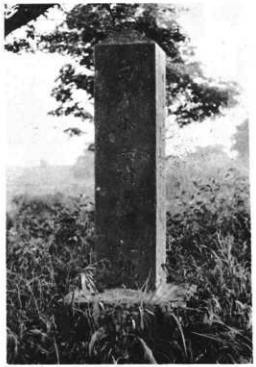
晒の浦風景

俵転がし場跡

上番役人　野村邸跡(井上米雄管理)

米蔵基壇

高瀬官軍墓地　合祀塔



西郷小兵衛戦死の地

西南役の砲弾と小銃弾
(田添夏喜蔵)

西南の役跡

明治１０年（１８７７）２月２２日以来高瀬町及びその周辺は、西南の役最北限の激戦地となった。政府はこの戦いで戦死した３９４柱を弔うため高瀬新町裏の景勝の地に官軍墓地を造った。近年この墓地を改葬し、合祀塔が建てられ、敷地は児童公園となった。又、墓地改葬の際、将官、下士官の軍服が出土した。

繁根木八幡宮は戦国時代相つぐ侵略によって荒廃した

繁根木八幡宮の石塔

官軍墓地出土の将校軍服
(田添夏喜蔵)

西郷松子書簡（橋本真情蔵）

が、その後加藤清正によって再建された。この地は軍事的要衝であったため、防塁として活用することを考慮し特に堅固な石垣が造られた。西南の役に際し官軍はこれを保塁として薩軍を撃退した。巨大な自然石を積み上げた特殊な構築で、史実を物語る貴重な資料である。

明治１０年２月２７日薩軍は高瀬総攻撃を開始した。野津少将等の率きいる官軍は繁根木八幡宮に本陣をおき、繁根木川をはさんだ攻防が終日続いた。薩摩１番大隊１番小隊長西郷小兵衛（隆盛の末弟）は陣頭に立ち指揮奮戦したが、敵弾に胸を貫ぬかれ３１才を一期に戦死した。

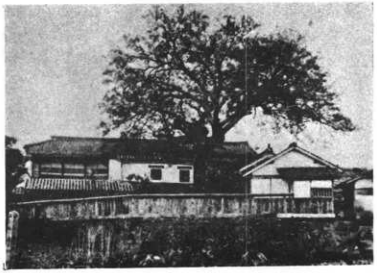
今その地永徳寺に標識の石碑が残っている。その後大正昭和の初期にかけて、小兵衛の碑を守り続けた永徳寺の橋本家に、小兵衛夫人（松子）から花料と礼状が送られた。

有栖川宮熾仁親王は、西南の役平定のため征討総督の任を帯び、明治１０年２月２３日高瀬に軍を進め、繁根木臼杵宅（現吉田病院）を本営とし、征討軍の指揮にあたられた。

宮は、この折庭の榎の大樹が鳳凰に似ているところから本営を「鳳樹楼」と命名された。

本営跡には記念の石碑が建てられている。

征討軍本営跡



下左　本営跡記念碑

下右　有栖川宮熾仁親王

釈迦如来金銅座像

多聞天像

清源寺釈迦仏・多聞天像

（市指定文化財）

いずれも清源寺より大覚寺へ移管されたもの、釈迦像は像高４２センチの鋳銅で、彫法に大陸性が見られる。秀麗な容姿がこの像の特徴であろう。多聞天は、もと四天王の中の一つ、鎌倉期の慶派の流れをくむ写実からくる躍動感、量感のあふれたたくましい彫刻作品

高さ８３センチ

（大覚寺蔵）

広福寺聖観音立像

「縁の観音さん」の愛称で人々に親しまれている。元旦と、1月18日の命日には小代山上の観音堂に移して開帳される習わしとなっていた。かねては秘仏として厨子深くに収め広福寺本堂の内陣に安置されている。秘仏ゆえに保存が行きとどいて、今なお金色さん然と輝やいている。

広福寺の古記録帳に「春日作」と出ているのはこの像のことであるが、本体には銘はない。技法や、容姿の上から鎌倉末期から室町初期ごろに造られたものと推定される。

とくに顔のあたりから衣文などに写実的な意図が顕著に働らき、端麗で、均斉のよくとれた姿はさらに優美さを感じさせ、藤原彫刻の特技と鎌倉様式の、理智主義が写実主義に迎えられてでき上ったものと思われる。

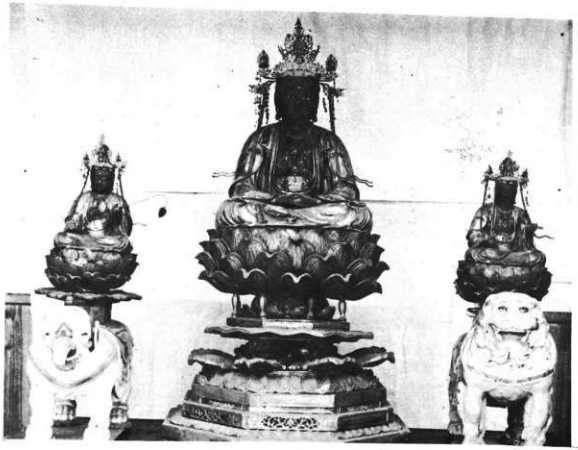
両手を前にかざし、天衣をひじにかけて左右に垂らし、内に向けた左手に蓮華を持ち、素肌の胸に瓔珞をかざし豊満な童子形の頬に微笑を浮かべ、わずかに外に開いた両膝をうすい裳で被おい、岩座の上の蓮台座上にすんなりと立つ端麗な姿は他に見ることのできないこの像の持つ特長といえよう。

広福寺聖観音立像（市指定文化財）

小代山観音堂は鎌倉時代の末ごろには広福寺の所管に入っていたらしく、この観音像が当初からあったものでないとしても、可なりに古い時代から小代山観音堂の本尊として多くの人々の信仰を一身に集めていたにちがいない。

一般に観音は、大慈悲心の体現者とされ、あらゆる形の苦難から、あまねく一切の衆生を救済するものと信じられる。観音という場合、容姿の変わた変化身に対して立像、座像の別なく、「聖観音」と呼んでいる。広福寺観音がその例である。

第3章　美術工芸



広福寺本尊　釈迦三尊像

広福寺本尊釈迦三尊像　（市指定文化財）

頭に華麗な宝冠と、胸に瓔珞をかざし、簡素な腕釧をつけた手を法界定印に結び、豪壮な蓮座上に結跏趺坐する中尊釈迦如来を中心に、右に、蓮華を持ち、宝冠、瓔珞で身をかざり、白象に騎乗する普賢菩薩と、左手に経巻と、右手に剣を持って唐獅子に乗る文殊菩薩を両脇侍に従え、脱乾漆に金箔をおく豪華絢爛の三尊構成の像である。

豊満な面高顔に微笑を浮べ、額に水晶の白毫と、伏目の眼にガラスの義眼を象嵌し衣文の彫法の写実性を鎌倉様に求め見事に造り上げている。室町後期の作という説があるが、室町初期広福寺創建当初から本尊として伝えられたものとも考えられる。

右脇侍　普賢菩薩右側面

中尊　釈迦如来

左脇侍　文殊菩薩左側面

地蔵菩薩半跏像

（市指定文化財・大覚寺蔵）

総高６０、５センチ、像高３８、５センチの木彫膝箔像である。頭冠がなく、多くの玻璃小玉を連ねて組んだ金属製透し彫りの胸飾りの瓔珞が素肌の胸を一ぱいに被い長く垂れ下がる。右手に錫杖を持って立て、左掌上に蓮座をつけた宝珠をのせ、かざすようにして前に出し、右膝を曲げて足先を内にし、左足を下へ垂らして反り花の上に軽くもたせて蓮台上に半跏し、下を伏目に深い冥想に耽る姿である。着衣の全面を、多種多様の繊細優美な截金施文で飾り余すところがない。元禄中葉（１６９５頃）頃の製作と推定されているが、技法の上で地蔵菩薩を通して、鎌倉時代の写実主義の在り方を伝える著るしい例である。

元清源寺にあったものを同寺の廃寺後、釈迦牟尼仏、毘沙門とともに現在地大覚寺に移管された。

地蔵菩薩半跏像

地蔵菩薩像背部截金文

仝上光背

寿福寺本尊薬師如来両脇侍　右　日光菩薩　左　月光菩薩

寿福寺本尊薬師如来両脇侍日光・月光菩薩立像

繁根木山寿福寺は、天台宗比叡山延暦寺寺、繁根木八幡宮（旧郷社）神宮寺として淳和天皇の勅願に依り、天長元年（８２４）院内七坊を建立、薬師三尊を本尊に、加善大徳によって開基され、鎌倉時代以降高瀬五山の一つに数えられ、また近郷の多くの末寺を支配して栄えたと伝えられる名刹であった。当寺は明治初年廃寺となったがその廃跡には玉名郡役所の庁舎が設置された。現在の熊本県玉名事務所の建物で、その一隅に石仏、石塔群と一字の堂が現存する。これが寿福寺の遺物である。

堂内に安置される二仏像は、寿福寺本尊薬師如来両脇侍日光・月光菩薩で、いづれも木造金泥着色の立像。六角雲座と簡素な框座、受座、反り花と同形の蓮華からなる台座の上に、右像日光菩薩は蓮葉とその先端に日輪を、左像月光菩薩は月輪をかざす長い柄をそれぞれ両手に中尊に向けた形に持ち、同形の金属製透し彫りの、両端に垂れ飾りの瓔珞を垂らす宝冠を巻き上げの髻を被うようにしてつけ、つつましやかに直立し、飾り縁をめぐらす円頭光と楕円身光のまわりに一面に雲鳳文を浮き彫る金泥舟型光背を負う。流れるような衣文が立像にマッチして清楚さが漂よう。作者、年代不詳。日光菩薩総高114、7センチ、像高 76、4 センチ、月光 120、8 センチ、像高 78、6 センチ

如意輪観音座像

十一面観音座像

馬頭観音座像

清源寺六観音・釈迦牟尼仏

（市指定文化財）

清源寺は、高瀬寺町にあった臨済禅京都南禅寺末寺、正平2（１３４７）年高瀬氏の祖武敎の二男菊池武尚の建立、固山一鞏を開山とする。後村上帝、征西将軍宮をはじめ、足利、戦国諸将の尊信帰依が厚く、繁栄の一途を辿ったが、明治初年廃寺となり、伝来の寺宝、諸仏等各所に分散された。

この六観音は当時観音堂に安置されていたもので、廃寺後、釈迦座像とともに談議所町妙法寺に移管され、今日に及んでいる。

観音６体中、３体は立像、他は座像で、飾りつけた瓔珞のほか僅かの破損もなく完全に保存されている。童形の豊満な頬、隆起した鼻すじに面高の顔、全面を截金文様であやどる衲衣、各肢の写実的彫法による流動感など鎌倉様の流れを強く感じさせる。同伴の釈迦仏光背銘に、元禄10（１６９７）年５月１３日の日付があり、六観音の技法上の共通点を多く見出し、同時作と思われる。はなやかな仏教文化の粋を伝えるものである。

上左　聖観音立像
上中　千手観音立像
上右　不空羂索観音立像
下右　釈迦如来座像
下左　仝上光背銘

読坂阿弥陀如来鋳立像

読坂阿弥陀如来像　顔面

読坂阿弥陀如来鋳立像

高瀬読坂の県道筋にあり、早くから「くろぼとけさん」の愛称で町民に親しまれてきた。

天明6（1786）年、平山三郎左衛門、成富伝右衛門両家の先祖代々六親春屋菩提のため養父古開圭助実父成富伝右衛門が施主となり、高瀬町古開吉兵衛が京都住鋳物師田中伊賀掾に依頼して造立したもので、放射光背を負って蓮華座上に静かに立つ端麗な容姿に限りない阿弥陀仏の智慧と慈悲が感じられる。

像高2.40メートルの巨体も西南役の戦禍に倒され、右袖に銃傷を負いながらだまっている仏でもあった。

仝上蓮台下銘の一部

読坂阿弥陀堂全景

玉依姫女神像（玉名大神宮蔵）

総高93センチ、半伽の像高66センチ。緋の袴に十二単衣を着た貴族階級の女性の姿に造った神像で、頭には、頂上に鳳凰をかざし、冠台の左右に、多くの玻璃小玉をつけた瓔珞を垂らす唐草様透し彫りの宝冠をいただき、右手に八つ折桧扇、左手に宝珠を持って上げ畳座上に半伽する。全身濃厚な赤、群青、緑、黄その他の色や金泥などで極彩色したあでやかなすがたをしていて、神像にしては玉名で例のない珍らしいものである。貞観時代（859～875）頃より女神像が盛んに造られ、鎌倉時代（1192～1330）に写実主義が完成するが、この像もそれをもとにした作風が強く感じられる。

延久3年（1071）左近将監則隆が当国に下向、その娘玉依姫は玉名郡を化粧田とし、辻の城（玉名大神宮社地）に住み、月毎に阿蘇社へ参詣したことなどが古記に見え、後年玉名大神宮の祭神として、東相殿に合祠された。

肥後琵琶ではこの姫のことを「都合戦筑紫下り」に今なお語り伝えている。

上　玉依姫女神像

下　玉名大神宮本殿と東相殿

加藤清正寄進の能女面

（市指定文化財）

宮司家の重宝として伝来した清正寄進の能面で、桃山期（１５７０～１６００）の名匠等月作とされ、文化的価値が高い。

等月は熱心な能の愛好家清正のかかえ作家として移住、肥後の等月とも呼ばれた。

面は桐材で作られ、縦２０センチ、横１３センチ、厚さ６センチ。両頬にえくぼがあり、神面の特徴をもつ。米かみ、頬部の欠損、色彩を復元想定すれば、品格すぐれた高貴な女神面であることが理解できる。

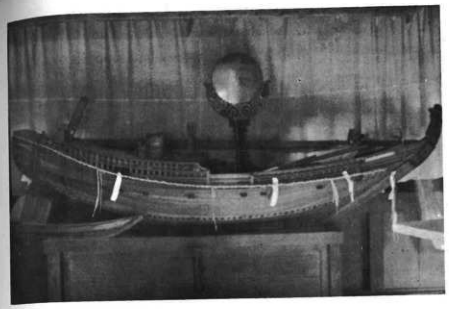
同宮の能興行に関しては天文の頃の文書（公貞注進状等）に松囃子、法楽、愛登（いるかがえ）、跡目等の能おどりが見える。座は神人中の大夫が構成し、享保（１７１６～１７３４）ごろまで家筋は伊倉町中に４０数家あった。加藤家もしばしば同宮で盛んな伝統的能楽を催し、また能師を好遇した。清正は慶長１０年石塘成就の祝いにもこの能を興行させ記念として能面を与えている。

能師の子孫は現在も大夫と呼ばれ、祭礼の装束仕として神事にたづさわる。能の伝統は同宮末社にも残存している。

（伊倉南八幡宮蔵）

上　伊倉南八幡宮
　　清正寄進の能女面
　　（市指定文化財）

下　伊倉南八幡宮社殿



外島宮蔵廻船模型

外島宮蔵廻船模型

（市指定文化財）

大浜外島宮の御神体としてまつられている。500石積み廻船の十分の１大に作られた全長３m、杉、桧、楠の柾目材を用い、極めて細密、精巧にでき、伝馬船やその他の部品にいたるまで完備されている。

外島宮年季祭の御幸式に使用される。

中　外島宮献納　狛犬（西）

下左　仝上基台東面刻銘

下中　仝上北面刻銘

下右　仝上東面刻銘

外島宮　狛犬

（市指定文化財）

大浜町が江戸時代中後期頃廻船問屋町として栄えたが、高瀬港の外港ともなり、十数隻の大坂向け回船を始め数十隻の船舶を保有して、港は賑合いを呈した。港や船に働らく船人たちが、下関、大坂方面の問屋の協力を得て、大浜町の鎮守であり、海の神様である外島宮に献納したものである。港町大浜の歴史を知る上の貴重な資料である。

流釉茶碗（宮川英一蔵）

笹がき文筒型水差
（横山岳朗蔵）

笹がき文筒型水差

（市指定文化財）

高さ22.8cm、径14cmの円筒で、表面を横、縦3段に区切り、平行線の力強い笹がき模様が、千段巻技法によくマッチし効果を奏している。鉄地色の上にかけられた白釉がうまく融合し荒目の地肌に生かされ独特の味をもつ。

梅花文様四脚盃洗（宮川英一蔵）

梅花文四脚盃洗

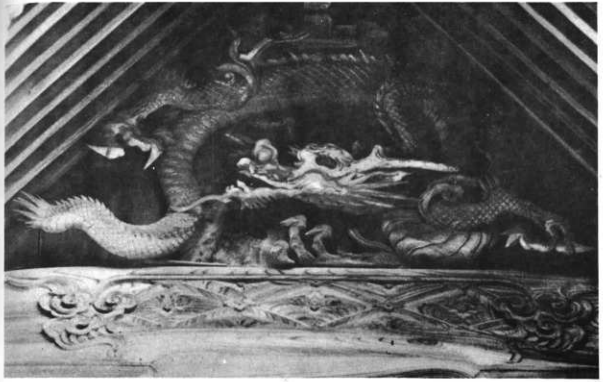
（市指定文化財）

壺型の腹部を四つくり抜き、残った部分を四脚として作られ、上縁に銀製丸底碗をはめこんで盃洗にしたものである。かすかなうす青を浮かした鉄地釉を主調色に、肩の四方に白釉を盛り上げて梅花を表出し、雅趣極まりがない。

流釉茶碗　（市指定文化財）

上縁の大きく開いた鉢型を呈し、底部に切りがねのあとが渦巻いている。

よく枯れきって軽く、高麗陶法を伝えた状態の濃厚な作品である。淡く沈んでにぶく光る鉄地色に厚い白釉が流れて青色を生じ、わび、さびを出している。



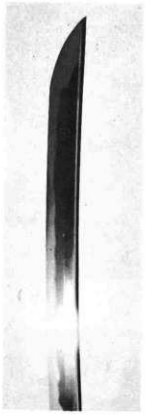
晒神社妻飾り龍の彫刻

晒神社の彫刻

菊池川河口に臨み、晒神社が鎮座する。榊神宮ともいい、海運の神として尊崇が厚い。本殿は桁行1間、梁行5尺程の小さな規模に過ぎないが、外郭の妻飾りに、東に波に翼龍、西に雲に龍、その下に波濤に菊花ぼたんに戯れる夫婦唐獅子、波に夫婦兎、波に麒麟、ぶどう、ぼたんなどの白木の彫刻をちりばめ、桃山様式の粋を今日に伝えている。中でも西の妻飾りの龍は特に優れ不思議な伝説があり、この龍が夜な夜な抜け出して菊池川の水を飲んだといい、また民家の家畜が毎夜のように何物かに襲われ厩の付近に血痕を見ることもあり、怪物の正体は何物であろうと物色の末、お宮の龍を調べたところ爪先に血痕を認めたので、目玉に五寸釘を打ちこんだ。それ以来怪事は止んだという。真に迫る出来ばえを形容した話である。作者は小浜に住んだ喜三郎で、現在の石原家の曽々祖父、若くして彫刻家となり、晩年晒神社の改築に一生一代の精魂を傾けたという。石原家には彼の使った工具が残ってある。

晒神社々殿　○印龍の位置

本殿西側彫刻



刀　九州肥後同田貫上野介

（市指定文化財）　吉崎超蔵

桃山時代
長さ　７５センチ
反り　2.3センチ
元幅　3.6センチ

鎬造り、庵棟、鎬高く幅広く、身幅も広く元と先の差があまりない。匂深く冴え、地鉄は無地、帽子は乱込み、返りがない。刃文は大湾れ、茎は生ぶで目釘穴１個あり、僅か片平山型の栗尻で、一文字の浅い鑢目がある。刀姿が壮重、剛健で、表銘に作者名の鏨彫りがあり、初代上野介正国の野心作で、現在のこる同田貫中の最高の傑作であろう。

太刀 八幡宮神剣

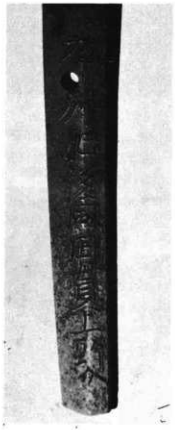
（県指定有形文化財）

繁根木八幡宮蔵
江戸後期
長さ　120センチ
反り　2.9センチ
元幅　3.5センチ

鎬造、庵棟、中鋒やや延び、反りの高い優美な太刀姿である。鍛肌は無地に近く、細かで黒くさえ、刃文は互の目、焼幅広く、先端は鋒にかかる。帽子は乱込み、返りがない。鎬地に２条の樋を長く通して丸く留める。茎は生ぶ、上段に一文字鑢目に表、勝手上り裏、勝手下りの化粧鑢目が重なり、目釘孔２個をつけ、栗尻の片平山型を呈している。

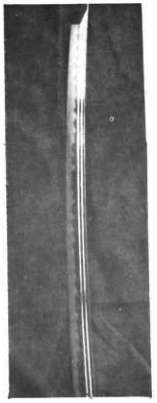
表に作刀の趣旨、年月日裏に作者の系歴、号、名を健達な鏨さばきで刻銘し、高瀬町が宗広に特別に作刀を依頼し、天保６年９月１日繁根木八幡宮に奉納したものであることがわかる。

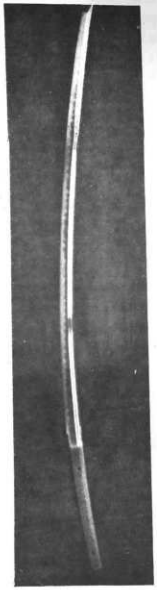
同田貫の真ずいを後期に再びとりもどした名匠宗広の代表作である。



下右　全左　茎　刀銘
下左　全上　元半部
上右　全上左先半部
上左　九州肥後同田貫上野介　刀身

第４章　古文書（古記録・墨跡）





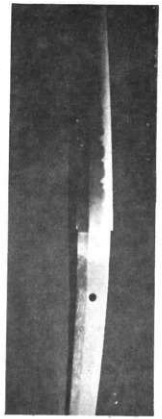
下右　全左　　全
下左　全左　　茎銘
上右　全左　　刀身
上中　全左　　先
上左　八幡宮神剣宗広　元半部

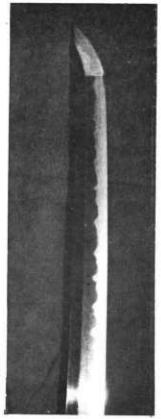
肥後同田貫

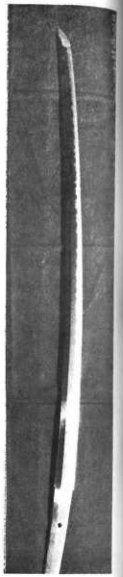
玉名の美術工芸は銘刀同田貫をもって代表されよう。同田貫は菊池来といわれる本国大和　来国俊の妹聟延寿弘村の系統をひき、玉名に来てはじめ石貫に住んだため石貫同田貫の名も残る。天文時代前後頃上野介、左馬介、治兵衛他２人が居た。一門の中で清国、正国が最もすぐれ、永禄年間より加藤家の御用鍛冶となった。

正国は上野介を名のり、亀甲に住し業に励み、子孫、弟子ら相つぎ明治初年まで十数軒に及んだ。

有馬介は清国の名をもって伊倉で鍛刀した。加藤家改易後は民間に入って木下家の祖をつくったという。







刀
肥後同田貫宗広

（市指定文化財）
大谷　剛蔵

天保六年十一月の銘がある。長さ71.6センチ、反り２センチ、身巾は普通で、形態は本造庵棟の中切先、地鉄は板目よくつみ、地沸気あり、刃文は互目乱れ勾本位の出来、帽子は乱込尋常に返る。茎は生ぶ、目釘穴１個、栗尻、鑢目勝手下りで優れた作風を見せている。

宗広は十代、同田貫後期の名匠である。

下右　全左　茎表銘
下左　全左　茎裏銘
上右　全左　刀身
上中　全左　先半部
上左　肥後同田貫宗広　元半部

繁根木八幡宮楼門

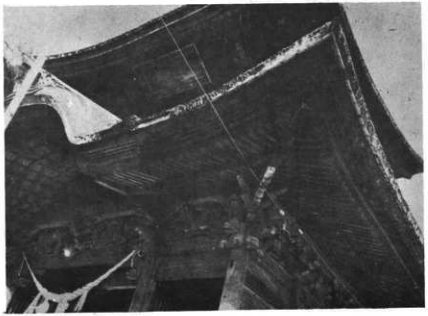
繁根木八幡宮

村上天皇の応和元年（961―説応和２）、勅願によって大野別府の政所紀隠村が山城国男山石清水八幡宮を勧請して大野郷250町の鎮護としたと伝えられる。

以来六百数十年のあいだ郷民尊崇の中心として神威赫々照らしたが、戦国争乱をあふり立てた武将たちの玉名侵入により、社殿はことごとく破壊され、境内も荒廃に帰した。

天正時代、加藤清正は国主として肥後に入ると、この荒廃を歎き、敬神思想の函養に意を用い、社殿の再建に努力した。こうして造営されたのが現在の建物である。

桃山様式を取入れ、特に楼門の唐破風、二層の楼閣に鳳凰鳥、波に玉持つ向い竜、天井支切りのたわむれる三獅子にぼたん、神殿の力神、りすにぶどう、竹に虎等を始めとする白木々彫の名作を残すところなくちりばめ、まことに豪壮華麗、善美をつくした建築美をかもしだしている。



全上細部

上　高瀬目鍵橋全景

下左　目鍵橋碑　表面

下右　仝上　裏面

高瀬目鍵橋

（市指定文化財）

菊池川の支流裏川にかかる。ここは永徳寺御蔵、御茶屋と熊本とを結ぶ要衝の地であったところ。

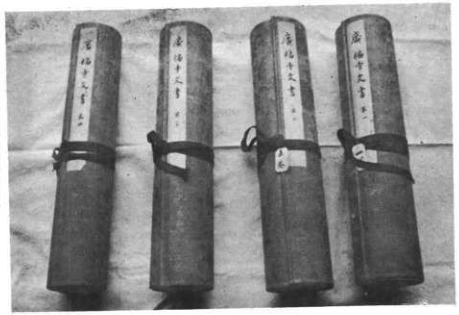
全長15メートル、幅員4メートル、スパンドレルの径6、7メートルの規模をもつ凝灰岩の二重橋で、嘉永元（1848）年町奉行高瀬舜平らによって架けられたもの。である。

中央橋脚の下端に川上に向かう脚幅の水切りの備えや、半円周を形づくる楔石をのぞく石材の重なる目地が水平になる点が注目され、二つのアーチと、中ふくらみ反りかえる路線の曲線的な美観と、学理に基づく石造技術は実に見事である。

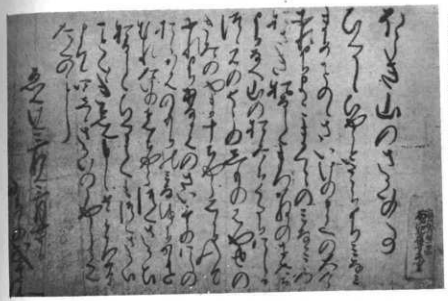
広福寺文書

歴代住僧によってかたく保護され今日に伝えられている多くの寺宝中、起請文、寄進状等の広福寺古文書四巻百八通が昭和14年国宝（現重要文化財）、大平寺文書3通ほか、聖観音菩薩立像が市重要文化財としてそれぞれ指定を受けている。

また細川家の帰依も厚く、法堂内正面の「満徳尊」の扁額は斉茲の寄進である。



広福寺文書（国指定重要文化財）



広福寺文書　菊池武重寄進状

菊池武重寺領寄進状

広福寺文書第1巻に収められた一通で、延元三年（1338）3月27日藤原（菊池武重）が、鳳儀山聖護寺（菊池）の四至境を寄進した書状である。

大平寺文書3通の内
その3

建暦3年（1213）2月28日、小代観音堂四至境を寄進したもので、小代に関する肥後最古の文書とする。

広福寺　大平寺文書（市指定文化財）

大智とその筆跡

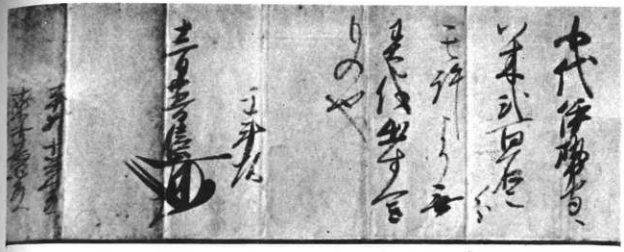
大智は宇土郡不知火町に生れた。幼にして大慈寺の寒巌義伊について得度、後鎌倉円覚寺ほか、京都、金沢の各寺において修業後元に渡り、諸山を歴訪し、さらに研鑽を積んで帰朝した。その後一時菊池聖護寺に住んだが、正平１２（1357）年石貫広福寺にうつり当寺を開山した。

大智はまた一方に書をよくした。広福寺に伝わる大智墨跡は「大智契文」ほか十数点を数え、中に竹筆がき数点が認められる。各種各様の筆法、書体を縦横に駆使し、大成した書風の格調は筆舌のつくすところでない。多年の峻厳な習練のはてに大智独自の書道芸術の境涯を樹立したのである。

上左　大智禅師墨跡
（市指定文化財）

上右　仝　上

下　大智禅師木像
（広福寺蔵）



光徳寺文書　加藤清正下文

光徳寺文書

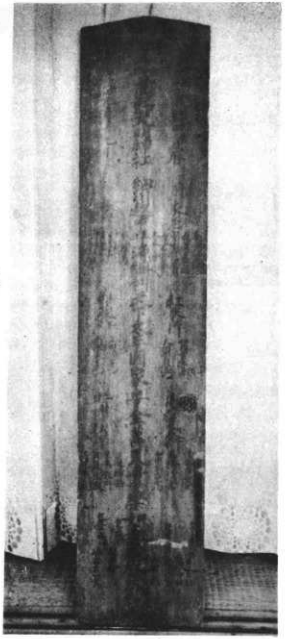
（光徳寺蔵）

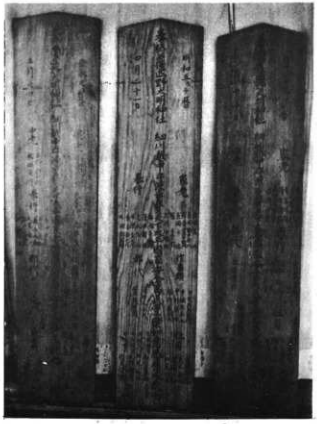
龍造寺氏の没落後、肥後一円は島津氏の手中におさまった。小代氏もその下に靡いたが天正１５年（１５８７）豊臣秀吉が島津氏討伐のため、肥後へ下った際には遠路小倉まで出迎え、道案内の役をつとめた。島津平定のあと、肥後は佐々氏の領分となったが政治の実効上らず、一揆さえ起ったため、秀吉の怒りにふれて切腹を命ぜられ諸城主もことごとく退けられたが、小代氏ただひとり、一揆の与党に加わらなかったのでそのまま命脈を保ち、新領主加藤清正に仕えることとなった。小代山筒が嶽城は城北の要衝にあたり、そのため一族の加藤美作守政次をここに封じて小代氏（親泰）を葦北津奈木城にうつし四千三百九十石余りを与えた。この時親泰の父親忠は富尾山（玉名市富尾）に光徳寺を建て宗虎と号して仏門に入った。清正もその志に対し禄二百石を隠居分として給した。光徳寺は後に玉名大坊に移され今日に至っているが、下記の通りの清正の書状が所蔵されている。

小代伊勢守
米弐百石之分
其許より無
異議出すべき
もの也
　　主計頭
十二月廿五日
　　清正花押

平井十兵衛殿
桑木　甚七殿

現在の光徳寺山門





上右　細川宣紀社殿修覆の棟札
（中央の黒点は西南役弾痕）

上左　細川綱利元禄4年社殿造立の棟札

下左　細川重賢　嘉永7年修覆棟札

下中　　仝上　　明和5年　仝上

下右　　仝上　　宝暦9年　仝上

細川重賢筆楼門額原書掛軸

仝左軸筆潮筆裏書（上）

繁根木八幡宮楼門額原書掛軸

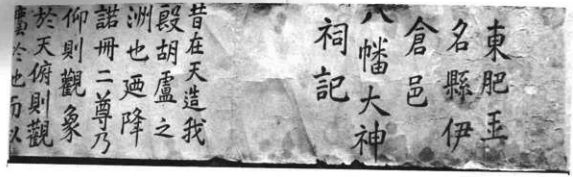
繁根木八幡宮に対する紀氏の敬神思想は、加藤家を経て細川家へ受け継がれていった。

年次大祭には侍使を遣わして祭事に当らせることが続いたが、当太守左近衛少将越中守重賢は「八幡宮」の大文字を染筆し、額に刻んで奉納、社僧、寿福寺当住豪潮並びに当高瀬町奉行上野真清はこれを祝って詩を賦し、額裏に記した。今楼門上に九曜星輝やく「八幡宮」扁額はそれで、原書は社僧豪潮が当太守の許しを得て、初め横書をたて書になおして軸に仕立て、裏面にその趣旨を書き留め、八幡宮神宝として永く保存することになった。

右仝上箱表書

仝上軸下裏書

左仝上箱裏書



伊倉八幡祠記巻頭

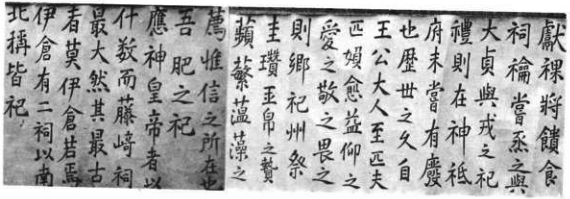
伊倉北八幡宮全景

伊倉八幡大神祠記

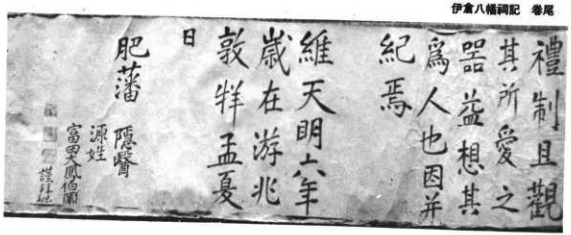
伊倉北八幡宮社宝の中に「東肥玉名県伊倉邑八幡大神祠記」一巻がある。肥藩隠医富田大鳳の執筆になるもので、日本の国の生いたちより八幡大神の出現、八幡宮の由来、伊倉八幡の創建、神の威徳、民族の信仰などの内容を９３０字にまとめて記述した、幅２９センチ、長さ９、３４メートルの紙本大作である。

富田大鳳は字を伯図、大渕日岳と号し大鳳はその名である。知行百石、再春師役をつとめた。

享和３年（１８０３）２月１５日、年４２才にて没し、立田山小峰墓地に葬られた。



伊倉八幡祠記　巻尾



豪潮筆紺紙金泥仏説阿弥陀経写経文の一部

国重文　筑前宗像神社石経碑

紺紙金泥仏説阿弥陀経巻

紺紙に金泥を用い、楷書に近い細字で本文１３６行の仏説阿弥陀経が書かれ、巻末に陀羅尼（梵字縦文）115字を加え、表裏返しに折りたたみ、緞子張りで表装してある。文化１３年豪潮６８才のとき筑前石刻の阿弥陀経を古閑季久の寄捨浄財によって書写したものである。

石刻とは筑前（福岡県）宗像郡田島村田島神社境内にまつられた阿弥陀経を刻んだ石碑のことで、現在は宗像神社宝物館に収められ、国の重要文化財に指定されている。中国宋から渡来したもので、経文は随の陳仁陵の書と伝えられる。長方形に切った碑石の上に屋根型のおおいをのせ、二段の台座を下につけ、正面に仏像を浮き彫り、裏面一ぱいに、阿弥陀経と、往生浄土呪文が細かく刻んである。

豪潮筆の六曲屏風

豪潮の名は、書家としても知られ、肥後三筆の１人として独特の書風をもち、その筆跡については、いろいろの見解があるが、旧来の他の筆跡に見ることのできない墨色を巧みに生かした斬新さを感じさせ、熟達しきった筆のさばきと気迫とが一致してほとばしり出る墨色のあとはまさに豪潮書道芸術の権化というべきものであろう。

（市指定文化財）

豪潮筆　六曲屏風（橋本二郎蔵）

右　豪潮筆　宝篋印陀羅尼写経軸（藤村不二人蔵）

豪潮筆　宝篋印陀羅尼梵文

縦81、5センチ、横27、5センチの広さの絹地に淡墨で10行275字の梵字が筆者豪潮の宝篋印陀羅尼の精神と書道芸術に透徹した境涯を如実に示すかのように、優美、かつ壮重に書き綴られている。

豪潮は玉名が生んだ名僧で、仏教史上数々の業績をのこしているが、書画を能くしたこともまた人のよく知るところであろう。

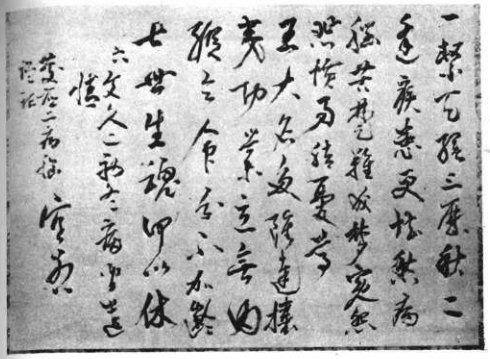
紀元前273年、インドマウルア王国に君臨し、第3代を継いだ阿育（アショカ）王は八万四千のスツーパ（仏塔）をつくってこれに仏舎利（釈迦の遺骨）を納め、中国呉・越王弘俶は八万四千の金銅塔をつくった。豪潮はこれらの故事に倣って八万四千基の宝篋印塔の建立を発心し、各地の仏跡を遍歴して次々にその初心を遂行して行き塔身の一つ一つに宝篋印陀羅尼経文を納めた。この梵字文はその写経の一つで、豊前英彦山主伊田氏の求めに応じて書写したものである。

文化13年（1816）の秋、豪潮68才のときである。

梵字はインド古代の文字で、塔碑などに広く用いられている。一字づつは仏、菩薩をあらわし、長文のものを陀羅尼といい、平安時代に天台・真言の密教とともに日本へ伝えられた。

豪潮の建てた宝篋印塔の塔身には大梵字「シッチリヤ」を刻む。この字は宝篋印陀羅尼経の最初にくる一字であるが、ここに掲げた宝篋印陀羅尼梵文では第3字目に見えている。また陀羅尼経では、神呪（じゅ）力及び塔の威力によって貧窮の報いを消滅し、たちまち富貴に到らしめ、七宝雨の如くに降り注いで欠乏するところがないと説いて、陀羅尼経の利益をおしえている。

第5章　民俗資料



平野国臣が松村大成に送った書簡（松村敬三郎蔵）

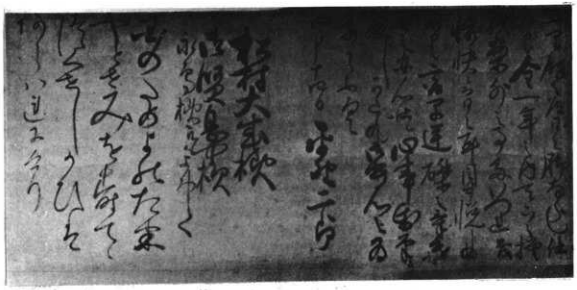
松村大成文、筆（松村敬三郎蔵）

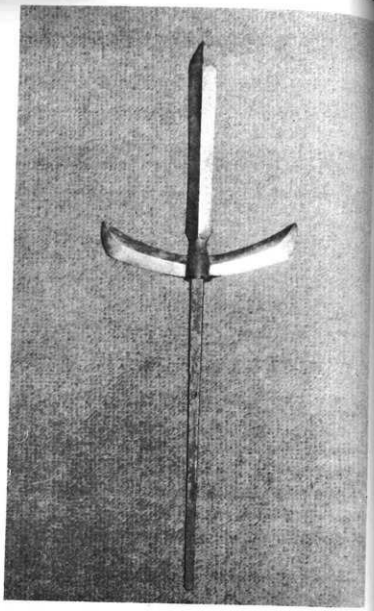
志士平野国臣の槍

立願寺高津原の松村家に三ツ又槍一振が所蔵されている。松村家はもと梅林下にあり、幕末の志士松村大成の家である。代々医を業とし村民の徳望を集めた家柄であるが、大成は維新の風雲に立ち上がり、第三平（永鳥）子深蔵等を指揮して倒幕勤王を鼓吹し、みずから東奔西走した。筑前の平野国臣、薩摩の西郷吉之助、熊本の横井小楠、宮部鼎蔵、筑後の真木和泉守、庄内（山形県）の清川八郎その他多くの同志が松村家に出入して密議を重ねた。大成は吉田松陰、藤田東湖との親交も深かった。

中でもとくに多く出入し、長い期間滞在したのが平野国臣であった。大成が槍術を究めていたので、国臣が松村家を辞して江戸へ上るに及んで記念に槍一振を贈ったのである。

この槍は、鎬（しのぎ）を身の中心にとる総両刃の十文字鎌型の形式で極めて優美に作られている。

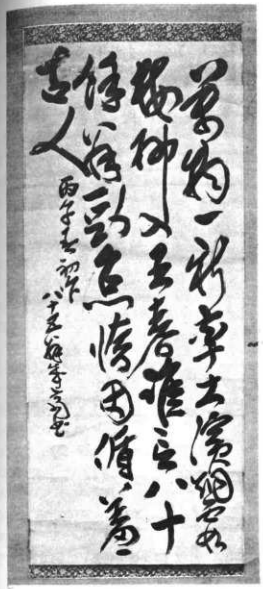




上左　平野国臣が松村大成に贈った自作、自筆の歌短冊（松村政三郎蔵）

上右　平野国臣が松村大成に贈った槍の穂先（松村政三郎蔵）

下　指名手配に用いられた平野、高杉、西郷の人相がき木版刷り



右　仝「高出世屋問」一行書

左　西依成斉書七言絶句

西依成斉とその書

西依成斉は、名は周行、通称を儀兵衛といい、成斉はその号である。元禄15年（1702）8月12日玉名郡富尾村（現玉名市）に西依称三郎右衛門の二男として生れた。長ずるに及んで気性、容貌が人にすぐれていたので同郡前原村（現岱明町）の儀学者前原文軒に望まれてその養子となったが、文軒の死にあい西依姓に復した。はじめ玉名村の大塚退野に学び、後京都に出て若林強斉の高弟となった。師の没後推されて同塾の講主となり、もっぱら塾生の訓育につくした。

成斉は平素勤王の志が厚く、居間には常に長柄の槍をかけ、朝廷に事が起れば御所の南門は予一人で守るといっていたという。一方書をよくした。富尾の生家西依家にのこる筆跡数点の中に、成斉の人となりをよくうかがうことができる。

安政9年（1863）7月4日、京都において世を去った。年96才。京都東山の清閑寺に葬られた。

繁根木八幡宮節頭

繁根木八幡宮節頭

繁根木八幡宮は、旧坂下郷高瀬町外７箇村の郷社として郷民の尊崇を集めた社である。大祭に氏子の奉仕する節頭は特色ある郷土の伝統行事の精華として知られる。高瀬町外７箇村が輪番で、華頭３人、馬３頭をくり出し、大祭前より奉仕者一同俗世間から、離れて精進小屋に入る。ここは女人禁制すべて男世帯の生活で祭日奉仕の諸準備をする。

前日になると一同正装で川、または海に入り、しお水を汲んで穢れを払う。翌１０月１８・１９の大祭日になると、狩衣、烏帽子姿の稚児の節頭は、奴姿の４人で駆する飾り馬で精進小屋を出て、社の表参道より拝殿前へ乗り入れ、柄杓振りの節頭唄の音頭に合わせ仲間衆の柏子で節頭踊りを奉納し終れば下馬して拝殿に入り、所定の位置に着席すると大祭の儀式が開幕となる。式が終れば節頭は待ち合わせた馬に乗り、節頭踊りを踊りながら、部落廻り、町廻りに向い、酒肴を準備した家の前で節頭踊りを踊って家内繁昌、店の発展を祈念する。神社側は、長年来大祭の恒年行事として積極的に推進し、氏子もこの行事に奉仕することを無上の光栄と感謝してよく協力し、うるわしい伝統をつくっている。

繁根木八幡宮全景

伊倉八幡宮ねり練（ネロミヤー）

伊倉南北両八幡宮のネロミヤー行列は、県下に類例を見ない両宮独特の伝統神賑の一つとして知られている。４月、１０月の祭日に、美しく着飾った年頃の女性が烏帽子、天冠、狩衣の稚児を伴って行列をつくり町をねり歩き社参する。

身を清めるための芋の輪くぐりの神事から始まる古代の行事である。元来両八幡に奉仕したみこの行列で、その起源は古く、ネロミヤーの語源は練り御前だといわれる。

両宮の勇壮な節頭飾り馬追いに対し、玲人による雅楽を伴う優雅な行事である。またこの行事に基づく人身御供の伝説は県外まで広く知られている。

上　伊倉町をねりあるく
　　ネロミヤー行列

下　節頭飾り馬追い

玉名の若衆神楽

伊倉南北両八幡宮などに奉納される神楽は「玉名の若衆神楽」として知られる典型的な肥後神楽である。未婚の青年たちが真榮木から地固めに至る１２の舞を３３段でおおらかにまた勇壮に舞う。

地謡や神宣歌を伴う歌神楽や錦の狩衣に神面をつけ劇的演出をする鬼物の二天などがある。

弾奏、天垂れ、切り分け、巴以下の舞の技法があり、囃子は太鼓笛、採り物は玉鈴、榊、真剣、弓矢、御幣、三方などを用いる。

村々の祭日に舞うが、郷社の神前で舞い得れば一人前となる。

神人の資格をもって舞い、早朝より夜半まで舞いつづける伝統がある。

上　鬼物（二天）神楽

下　玉鈴、真剣による二剣舞

梅林菅原神社　流鏑馬

梅林菅原神社　流鏑馬

（市指定民俗資料）

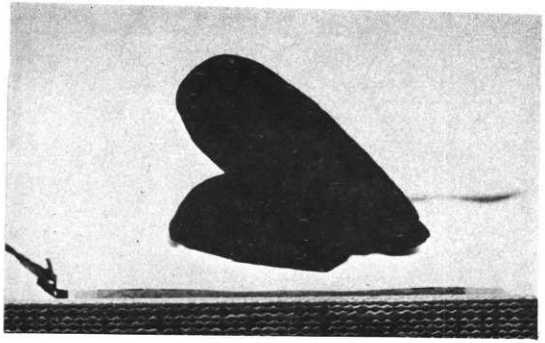
「ヤクサンドン」で世に知られ下、安楽寺・津留の氏子によって奉納される行事である。大祭日とその前後５日に亘る手数入り行事の中の呼物は大祭日１１月２５日の流鏑馬である。社前の長い馬場の東端より、狩装束の乗手は疾駆する馬上より弓に矢をつがえ、３箇所の的を次々に射る。勢子のささら竹にあおられて馬は速度を加え終点へ突っ走る。こうして３回繰り返えされて流鏑馬の行事は終る。

この行事が勇壮活発、かつ典雅で、鎌倉武士の古格を今に伝える伝統床しいものである。

萩尾の棒踊り

（市指定民俗資料）

江戸後期、武士から平民に降り、浮田池畔に整骨医、飛脚を業として余生を送った浮田松四郎が、風来の素浪人より棒術、真陰流護身術の秘伝を授かり、次いで萩尾の百姓萩尾敬之十、萩原敬四郎、萩尾力蔵等に棒術が伝えられ、部落全般に拡まった。百姓に武術は許されず、表面は踊りとして唄の音頭に合わせ踊る。踊手の服装、棒さばき、子供の助太刀に至るまで純粋な武術であることがしのばれる。勇壮、かつ迫力溢るる郷土芸能である。



勅使の冠（築地すみえ蔵）

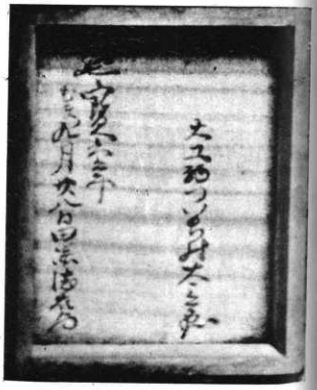
勅使の冠

築地上、築地家に「勅使の冠」と称する古びた冠が保存されている。今は神棚に納めてあるが、以前は家の屋根裏の棟に、つづらに包んでつるし、「子孫開けて見るべからず」と注意書きが添えてあったという。神棚のすす払いをしていたときほこりが目の中には入って眼病となり、ついに失明した。祟りであるとしてこれを恐れ、以来見ると目がつぶれるといい伝えられてきた。

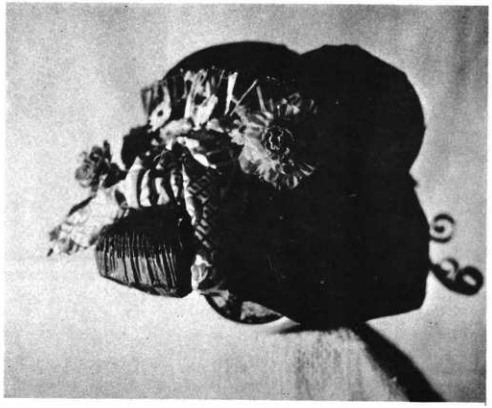
縦の径１４センチ、横の径９センチの小さな楕円状で、頂点の深さ４センチの中高にふくらんだ額（頭の上部を被う部分）の後部に縦の径５、５センチ、横の径８センチの、少し上部に小さく、頂点をまるくした巾子（こじ結い上げた髪を被う筒形の部分）が４５度前に傾き、厚さ３ミリの総皮漆仕上げの、磯（はち巻きの部分）のない一見古式的な形になる。

紀氏が代々繁根木八幡宮別当として奉仕した折に使われたもので、築地に住んだその子孫田添徳右衛門以来箱に納め保存し、今日に伝えているものである。

全上箱底書き



上　提灯かつら左側面
下　提灯かつら正面



提灯かつら

古い提灯の廃物の竹と紙の特質を利用して作った女装演劇用の「かつら」で、発案製作者は弥富村岩崎原（現玉名市）に居住した上野いちさんである。島田髷の髪型が最も多く、上野さんの手になる作品は数知れず、この作品は特別に造ったものであるため、花やりぼんや櫛などをつけ、彩色した手の入れようであるが、本来は飾ることをなるべく避け、明朗で、ユーモアに富む素朴さを強調して作ったところに特徴があるが、郷土色溢るる庶民生活の一面を後世に残すための資料として香り高い。

明治十年二月、西南の役に際し、高瀬は駐屯する官軍に薩軍は大挙猛攻を加え、両軍のあいだに激戦が展開され多くの死傷者を出した。政府はこの時の死者を高瀬新町裏に官軍墓地を造営してねんごろに弔った。以来毎年町では７月２５、２６の両日に亘って招魂祭を開催してその霊を慰さめ、余興として各町内に仮設舞台を設け、それぞれ工夫を凝らした演劇が披露され、観衆は町を埋めた。中での呼物は「高瀬にわか」で、庶民の日常生活状態の一こまを単的に捉えて題材としたのが多く、素朴で、高瀬弁まる出しのユーモアが人気を呼んだ。この女役の扮装に用いられたのが提灯かつらである。

最近の急速的な時勢の進運には連れだち切れず、高瀬招魂祭も一大変革が行なわれ、提灯かつらも市民の脳裏から消え去ろうとしている。

永松大悦肖像

大悦２１才自筆台本（永松光豊蔵）

肥後琵琶師永松大悦

上小田の小さな山ふところに抱かれた静閑な農家に、肥後琵琶師永松大悦が育った。本名を敬蔵という。彼の肥後琵琶に対する執念は２０才足らずですでにこの道に熟達した。玉名村島（現玉名市）堀尾常喜を師とし、**農作業のかたわら１６才**のころから３、５キロの道を歩いて通い続け「武蔵崩れ」、「菊池崩れ」「後目」などのほか師の口伝による多くのものをおぼえ、また台本を書写して暗記し、みづから編曲して演奏したという。手技にも精通し、書をよくしたため道具はすべて手製、台本もすべて自筆のものを使った。とくに目を引くのは琵琶と豊臣勲功記全４５冊の大作である。

天性のすぐれた技術と頭脳とその努力が肥後琵琶師永松大悦をみごとに育て上げたのであった。

昭和２８年１２月８１才で世を去った。

今永松家に彼の吹込んだ「菊池崩れ」６枚、ほか５編２１枚の音盤、琵琶一挺、台本５６冊、机、硯などの遺品が保存されている。

大悦自作肥後琵琶（永松光豊蔵）

大悦自筆豊臣勲功記（　全　）

第6章　天　然　記　念　物

船繋ぎの銀杏

（県指定天然記念物）

伊倉北方にあり、樹令およそ６００年、幹回り目通り８メートル、高さ２５メートル、枝張四方へ２０メートルの巨木で、本幹は空洞をつくり、下部に２本の太枝生じ、上部は３本に分れて小枝をつけ樹勢ますます旺盛である。空洞には小社をまつる。伊倉台地の西端の、下一帯は丹倍津といわれた良港で唐船出入し江戸初期まで日明貿易の根拠地として栄え、このころ船を繋いだ銀杏といわれている。

船繋ぎの銀杏

伊倉丹倍津跡及び舟つなぎ銀杏遠望

山田日吉神社の藤

山　田　の　藤

（県指定天然記念物）

この藤は、山田氏神日吉神社の境内にあり、樹令およそ180年。根もとより二本に分れ、東幹は根回り、1.60メートルあり、くねりくねって多くの小枝を生じ、高さ4メートルの棚の上にはい上がる。西の幹は根回り1.50メートル、地上6～70センチばかりのところで太枝数本に分れ、延々小枝をからませて同じ棚にかかり、東の枝と交わって東西14メートル、南北15メートルの広さの棚の面に拡がる。この藤は、学徳をもって知られた当区赤松助次郎の二男九右衛門が文化年間、旧坂下村の寺から分譲し、当社に献納植栽したものと伝えられる。5月上旬に開花し、1メートルを越ゆるほどの長いうす紫色の花房を満面に垂らし、〝心字が池〟に影を映す風情はまたかく別である。

開花期ともなれば遠近より観藤の客が境内を埋め、藤棚には即席短歌の短冊がひらめき落花を玉盃に浮ばせて風流を味わい、一方には絃歌、舞い踊りにその日を楽しんだ。

山田日吉神社境内（左側が藤のあるところ）

伊倉南八幡宮の大楠

伊倉南八幡宮の大楠

（市指定天然記念物）

この大楠は、伊倉南八幡宮境内、南の一角にあり、樹令およそ４００年、幹の太さ目通り７、８メートル、高さ36メートルの大木で、８メートルの高さで太枝数本が分岐し、東西３３メートル、南北２５メートルに枝を交えてうっ蒼と茂り、樹勢はますます旺盛である。

古来「雷神木」と称され、すでに江戸時代には社殿の棟数に加えられていた。また藩主の御用船用材として指定されたが、神木のため除外された。明治十年西南の役に際しては、天正戦乱の轍を再びひき起すことを恐れ、八幡神体をひそかにこの大楠の上枝の太岐に奉遷して戦禍を免かれた。なお、この神木に精が宿していると伝えられ、神木の中でも特に大切に扱かわれている。

伊倉南八幡宮神苑（○印楠）

伊倉南八幡宮のナギ

伊倉南八幡宮の神木の中にナギの大木があり、拝殿の南に枝を交えて高くそびえたち、その高さおよそ25メートル、幹囲り目通し２メートル、東西７メートル南北９メートルほどに枝をひろげ、地上より高さ10メートルのところで２本に分かれ、市内まれにみる老樹である。

ナギは古来熊野神社の神木とされ、玉名地方に熊野信仰の伝播と共に熊野の神が勧請され、この神木が植えられた。また熊野神は八幡宮の客神としての信仰が厚かった。

伊倉南八幡宮氏子は、毎年大晦日より元旦にかけて参詣し、ナギの葉をいただき、家々の神棚に奉斉して、一年の招福を祈り、正月五日にはナギの葉を用いる午王宝印神事が行われ、古来重要な祭儀とされた。

ナギの葉は、海上交通安全、悪病退散、安産、結縁などのお守りとして珍重された。

下　ナギの木肌
上　拝殿とナギ
左　ナギの全容

菊池川堤防のはぜ並木（一本榎上流付近）

菊池川堤防のはぜ並木

国鉄繁根木踏切より、下流の大浜大橋まで、約3.5キロに及ぶ菊池川右岸に３２０株余りのはぜの並木が残っている。大きいものは幹囲り１メートルをこえ、高さ７メートルに達し、樹令およそ２００年以上と推定される。

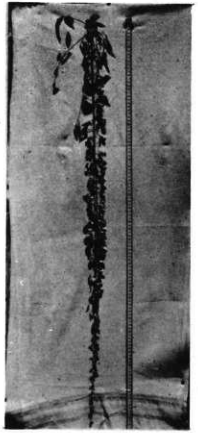
菊池川の清流に相応じて四季とりどりの風情をそえ、秋の紅葉は殊に美しい。その由来は、正保二年（１６４５）薩摩国桜島に漂着した外国人が櫨の実と製蝋器をおくり、その使用法を教えたことに始まり延宝年間（１６７３～１６８０）には桜島一帯にはぜの植栽とロウソクの製造が盛んに行なわれ、後周辺各地域に拡まった。

元禄１５年、主君の仇を報じた大石良雄は細川邸にお預けとなり、翌１６年２月４日切腹の身となったが、死の前日、介錯人安場逸平に薩摩の例にならいはぜの栽植を遺言した。逸平はこれを身にしめ、藩主綱利に言上、自らも苗を取り寄せて空地に植え多量の蝋を得た。これが肥後にはぜの伝わった初めである。

その後藩主宣紀ははぜの実を薩摩より手に入れて春日村に植えつけ同藩主重賢は宝暦（１７５１～１７６１）の改革で、奉行堀平太左衛門勝名に命じ、長屋にこれを試植させて成功し、幕府にはぜ方、地方にもはぜ係りの役人をおいて、空地、河川の堤防、山間の荒地など植栽の徹底につとめるなど、各藩主の保護奨励によって肥後全域に普及を見るに至った。

菊池川堤防のはぜ並木もその一つであることは言うまでもない。

玉栄館の藤



藤の長い花穂

玉名温泉玉栄館の藤

この藤は、玉名温泉玉栄館の旧館前庭にあり、樹令およそ１３０年あまりと推定される。根もとより４本の大幹に分かれ、その最も大きいものは周りが約1メートルほどもあり、４本がたがいにからみ合って地に伏し、立ち上がって何本にも分岐し、さらに多くの小枝をつけて高さ約４メートルの棚の上にはい上がり、東西約１５メートル、南北１１メートルに拡がっている。

４月下旬の開花期には、最も長いものは２メートルに近い紫色の長い花穂を満面に垂らし一大壮観を呈する。

あ　と　が　き

広い玉名平野と、その西北の小代山と、東に木葉の山並みに包まれた草深い台地、その影を映して洋々と有明海へ注ぐ菊池川、そうした美しい環境の中にはぐくまれた郷土「玉名市」これが私たちにとって一ぱんなつかしい心の描籠である。そこには悠久四千年の極めて古く、尊とい歴史が生きている。遠い祖先の人たちが長いあいだ、この郷土に住みついて、生活のくり返しの中に知恵の限りをつくしていろいろの道具をくふうし、改良して生々発展をつづけ、時代はさらに新しい時代を創造し、いろいろの道具と文化を伝えてくれた。これらには、これらを造った人たちの血と汗がにじみ、使った人たちの精魂がこもり、私たち玉名市民の貴重な文化的財産である。私たちはこれらを受け入れ、これらに学び、そして次代の人たちに引きつがねばならない。それもそのままのものであってはいけない。私たちによって新しい昭和の香りの加わったもの、玉名市の郷土的色彩の濃厚なすばらしいものでなくてはならない。

私たち玉名市文化財保護委員一同は、長い期間をかけて調査研究をつづけ、記録を作成して来たが、その数の多いこと、また素晴らしいことに今さらながら驚ろかされた。まだ残されたものも数多いことであろうが、一応このあたりでこれらのものをまとめ、何らかの形式で世に紹介すべき段階に立ち至っていると考え、過去四年間にかけて、小冊子「玉名市の文化財」として四冊を世に送った。不備の点が多かったにも拘らず、浅からぬ好評を得、返って恐縮の至りである。ところが、分冊になっているため、一貫した状態を理解しようとするとき不便さがある。これを除去するためには全一冊にまとめては、という御意見、御教示をいただいたので、その御期待に添うべく、また時あたかも本年玉名市発足20周年を迎え、これを記念する意味をもって、事務局側の積極的な推進意欲に力を得て「総集編」として再び世におくる事になった。私たちにとってもこの上もない喜びである。

既刊の四冊を全部解体し、第１章　古墳及びその出土品、第２章　史跡、第３章　美術工芸第４章　古文書（古記録、筆跡を含む）、第５章　民俗資料、第６章　天然記念物、の６章に分類し、掲載写真、説明文等の増補訂正を加え、国、県、市指定のものと、市登録文化財、若しくは、今後指定予定のものを合わせた総数９１件を、大小の写真２８-3葉を用い、十分に理解していただけるよう、そして、関係資料写真と説明を検討し、スペースの許す限り豊富にし完璧を期した積りであるが、なお浅学非才のため、粗末、不備の点が多々あると思う。

何とぞ御了覧の上、さらに暖かい御教示、御指導の程を懇願して、あとがきに代えたい。

昭和４９年３月３１日

玉名市文化財保護委員会

会長　田　添　夏　喜

編　集　部

玉名市文化財保護委員会

会長	田添夏喜
副会長	仲野俊良
委員	古財幸八
〃	石岡照吽
〃	山本　均
〃	東　弘典
〃	小川治雄
〃	田原富貴雄
〃	鶴上寛治
〃	森田民代

玉名市教育委員会

教育長	福山芳雄
社会教育課長	大磯英雄
〃 補佐	灰本貞雄
〃 係長	南　悟
〃 文化財係	磯田　実

付　　録

玉名市指定重要文化財一覧表

記号番号	名称及び員数		所有者（管理者）氏名
重第1号	廻船模型	1隻	吉永秀虎
重第2号	絵馬「大浜港」	1面	吉永秀虎
重第3号	高麗犬	1対2基	吉永秀虎
重第4号	聖観世音菩薩木像	1躰	広福寺
重第5号	吉利支丹墓碑	1基	（管）中山静雄、末藏
重第6号	繁根木補陀落渡海碑	1基	（管）井本重利
重第7号	宇佐公満墓	1基	東弘典
重第8号	宇佐大宮司公長逆修塔	1基	東弘典
重第9号	伊倉保一方地頭沙弥行恵供養塔	1基	東弘典
重第10号	肥後四位官郭公墓	1基	玉名市
重第11号	僧豪潮筆水墨絵座具	1枚	小川治雄
重第12号	僧豪潮筆紺紙金泥仏説阿弥陀経	1巻	水上ノブ
重第13号	小代焼流釉茶碗	1個	宮川英一
重第14号	小代焼梅模様四脚盃洗	1個	宮川英一
重第15号	小代焼竹篭模様筒型水差	1個	横山岳朗
重第16号	九州肥後同田貫上野介	1口	吉崎超
重第17号	僧豪潮画併題文珠菩薩画像	1巻	水深久弥
重第18号	僧豪潮筆六曲屏風	半双	橋本二郎
重第19号	廻船用鍛鉄製錨	1個	玉名市
重第20号	宝篋印塔	1基	（管）河野道則
重第21号	肥後同田貫宗広	1口	大谷剛
重第22号	大坊古墳出土品	1括	玉名市
重第23号	高瀬目鏡橋		玉名市
重第24号	大平寺文書	1巻（3通）	広福寺
重第25号	玉名郡倉跡推定地		玉名市
重第26号	梅林菅原神社「流鏑馬」（民族資料）		菅原神社
重第27号	青木磨崖梵字群		熊野座神社
重第28号	豪潮墨跡宝篋印陀羅尼経文	1幅	蔵村不二人
重第29号	浄光寺蓮華院跡出土鎮壇具及び古瓦		川原是信
重第30号	伊倉北八幡宮獅子香炉	1対	阿地部友幸
重第31号	建長の塔	1基	品川真澄
重第32号	肥後四位官郭公墓出土　青磁碗	1個	覚真寺
重第33号	伊倉南八幡宮の大幢	1本	東弘典
重第34号	紙本墨書大智仏法僧一行書	1幅	広福寺
重第35号	伝左山古墳		玉名市
重第36号	小路古墳　付　出土品一括		太田直之、玉名市
重第37号	清源寺・釈迦如来坐像・木造多聞天立像	各1躯	大覚寺
重第38号	清源寺六観音・木像釈迦如来坐像	7躯	妙法寺
重第39号	宝成就寺跡　古塔碑群　石仏群		（管）友江長男
重第40号	馬出古墳出土品	一括	玉名市
重第41号	脱乾漆造釈迦三尊像	3躰	広福寺
重第42号	木造地蔵菩薩半跏像	1躰	大覚寺
重第43号	築山の花棒踊り		築地花棒踊り保存会
重第44号	伊倉南八幡宮のなぎ	1本	東弘典

玉名市郷土史年表

（昭49.2）

時代	西紀	国のできごと		玉名市の動き
先土器時代	10.000	・日本列島の形成　日本人の祖先 打製石器を使う　穴居生活		玉杵名湾
縄文式時代	7.000	・いろいろの生活道具をつくる。 石器　骨角器　縄文式土器　呪器 装身具 竪穴式住居　貝塚 遊牧生活	前	
	2.000		中	・繁根木貝塚　・保田木貝塚　・桃田貝塚
	3.000			o伊倉宮の原遺跡 l
	1.200		後	o
弥生式時代	1.000	・稲作がはじまる　石庖丁　田げた 弥生式土器 定住生活　部落成立支配者 小国家分立	前	城が崎貝塚
	−1	鉄器・青銅器の使用はじまる ・葬制の変化甕棺　箱式石棺 副葬品	中 後	・立願寺松尾尾原・池田甕棺群・築地東（築山小校庭）甕棺群 ・梅林下秋丸遺跡・築地南大門遺跡・山田五郎丸跡
古墳時代		・大和朝廷の成立 ・古墳の造営がはじまる ・景行天皇東征説（日本書紀）	前	・繁根木箱式石棺　・玉名岡箱式石棺群 ・山下古墳（舟型石棺） ・稲荷山古墳
	391	・朝鮮出兵 ・大陸文化伝わる	中	・山田保多地古墳群　・築地西の山古墳群
	537	・任那に援軍を送る	後	・大坊古墳（小口積横穴複室・真珠　垂飾付耳飾　三角連続文） ・伝左山古墳（小口積複室横穴式　垂飾付耳飾短甲　環頭太刀　貝輪） ・馬出古墳（馬頭骨）　・小路古墳 ・永安寺東古墳（円・三角舟・馬彩色文称） ・永安寺西古墳（巨切石　円連続文称） ・石貫古城横穴群・富尾原横穴群（人物楯他線画）

時代	西紀	国のできごと		玉名市の動き
飛鳥時代	552	・百済より仏教伝わる		・石貫ナギノ横穴群（刀浮彫・円・同心円三角その他の彩色画・線画）
	598	・聖徳太子摂政となる		
	〃	・大阪四天王寺建つ　仏教美術おこる		
	607	・大和に法隆寺建つ		
	645	大化元・大化の改新		
奈良時代	708	和銅元・和銅開珍鋳造		・火葬おこる 築地西蔵骨壷　同四十九蔵骨壷　青野蔵骨壷　玉名岡蔵骨壷
	710	〃3・奈良に都を移す		
	712	〃5・古事記成る		709和銅2・伊倉北・南八幡宮建立説
	720	養老4・日本書紀成る		・玉名平野の条理成る
	741	天平13・諸国に国分寺を建つ		・日置氏玉名郡司となり、立願寺に政庁を置く 玉名郡倉・郡寺立願寺を建てたのはこの頃か
	752	天平勝宝4・奈良に東大寺を建つ		
	794	延暦13・京都に都を移す		・蛇が谷で鉄を造る ・山田保田地で須恵・土師などの陶器を焼く
平安時代	805	延暦24・最澄天台宗を伝える		
	806	大同元・空海真言宗を伝える	前	808　大同3・高瀬願行寺創建説 824　天長元・寿福寺創建殷 840　承和7・正野神社官社となる ・梅林菅原神社建立説
	901 901	延喜元・延喜式制定	中	904　延喜4・高瀬宝成就寺創建 939　天慶2・玉名大神宮建つ 961　応和元・繁根木八幡宮建つ
	1011	寛弘8・「源氏物語」成る	後	1069　延久元・大浜外島宮建つ
	1053	天喜元・藤原頼通鳳凰堂を建つ		1141　文治　・小代行平小代山上に筒が獄城を築き、これに拠る
	1109	天仁2・藤原清衡平泉に中尊寺を建つ		
	1175	安元元・法然浄土宗を開く		
鎌倉時代	1192	建久3・源頼朝鎌倉幕府を開く		1195　建久6・俊芿小代山上に正法寺を建立。朱子学を講じた　日本朱子学の始めとする説おこる
	1223	貞応2・加藤四郎左衛門宋より製陶法を伝えた		1207　建永2・石貫大平寺建つ（大平寺文書3通）
	1227	安貞元・道元曹洞禅を伝う		1250　建長2・山田建長の塔（俗説虎御前の塔）建つ 山田日吉神社を鎮座・山田郡郡の成立はこの頃か 築地浄光寺蓮華院とその境内の関白塔（大五輪塔一双二基）建立はこの頃か
	1253	建長5・日蓮法華宗を開く		1253　建長5・聖信坊湛空上人石貫大平寺に葬らる 1322　元亨3・伊倉本堂山行恵塔建つ

時代	西紀	国のできごと		玉名市の動き
南北朝時代				1351 正平6・高瀬清源寺建つ　・紫陽山広福寺建つ
				1355 正平10・菊池武尚　高瀬保田木台に城を築く
				1368 応安元・学僧絶海高瀬津より宋に渡る
	1392	明徳3・「大平記」成3		高瀬津・伊倉丹倍津繁昌におもむく
室町時代	1397	応永4・足利義満金閣寺を建つ		1532 天文元・山田白山宮比売神十二坊成立
	1401			1566 永緑9・宣教師アルメイダ高瀬で布教
	1480	〃 8・〃　明と交わる		1568 〃 11・上野国弘円上人等高瀬津より補陀落山へ渡海
	1534	文明12・〃　義政銀閣寺を建つ		
	1549	天文 8・〃　鉄砲伝来		
		〃18・聖フランシスコ・サビエル薩摩に来る		
安土桃山時代	1582	天正10・大村・有馬・大友三氏少年使節をローマに送る		1573 天正元・高瀬大覚寺建つ
				1580 〃 8・繁根木八幡宮へ節頭奉納始まる
	1600	慶長5・交通の全国統一が計られ、一里塚をつくり、並木が植えられた		1584 〃 12・竜造寺隆信の首級を高瀬願行寺に葬むる
				1587 〃 15・豊臣秀吉島津氏討伐のため高瀬に来て、願行寺に宿泊
	〃	〃・関が原の役		1600 慶長5・加藤清正高瀬御蔵・晒御蔵の経営にかかる
江戸時代	1635	寛永12・参勤交代の制を始むる	前	1605 〃 10・肥後同田貫初代刀工清正に抱えられ鍛刀
	1637	14・島原の乱おこる		〃 〃・清正菊池川下流堀替工事完成
				1619 元和5・明人四位官郭公伊倉鍛冶屋町に葬らる
				1632 寛永9・北小路又左衛門、島城安左衛門南関で小代焼の窯を開く
				1675 延宝3・三つ川天神社建つ
				1676 〃 4・細川綱利疋野神社々殿再建
	1702	元緑15・赤穂義士打入		1688 貞享5・朽木三郎入道三ッ川川床に大乗妙典を納めて経塚をいとなむ
	1798	寛政10・本居宣長「古事記伝」成る	中	1786 天明6・高瀬町古閑吉兵衛が高瀬町読坂に阿弥陀如来鋳造を建つ
	1825	文政8・幕府外国船打ち払い令を出す		1808 文化5・僧豪翊繁根木堂の裏墓地に宝篋印塔を建つる
	1827	〃 10・加賀鉄砲門(東大赤門)完成		1819 文政2・内田郷縄庄屋小森田七右衛門白石堰を築く
				1830 〃18・大浜町外島宮へ絵馬「大浜港の図」奉納
				1844 天保15・同　狩犬1対奉納
	1856	安政3・吉田松陰萩に松村塾を開く	後	1848 嘉永元・高瀬下町に目鏡橋完成
	1858	〃 5・安政の大獄		1860 万延元・勤王の志士平野国臣、梅林下の松村大成を訪う
	1860	万延元・咸臨丸太平洋横断		〃・石貫にめがね万延橋完成
				1863 文久3・元田永孚高瀬町奉行となる
明治時代	1870	明治3・平民に苗字を許す		1868 明治元・細川家の高瀬藩経営
	1871	〃 4・廃藩置県		1877 〃 10・西南の役起る
	1873	〃 6・西郷隆盛辞職下野す		・高瀬御蔵・宝成就寺炎上
	1876	〃 9・熊本神風連の乱おこる		・西郷小兵衛永徳寺に戦死
	1877	10・西南の役おこる		・伍長谷村掛介籠城の密使を玉名丸島に果たす
				・政討都督有栖川宮熾仁親王本営を高瀬に定む
				・高瀬に官軍墓地をいとなむ

玉名市の文化財
（総集編）
昭和49年12月20日　印刷
昭和49年12月25日　発行
昭和50年4月　増版
編集
発行者　玉名市教育委員会
印刷所　熊本市壺川1丁目3—26
緒方工房
0963㊷—4423